

琉球大学学術リポジトリ

可能表現の文

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2018-08-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 三寿, Murakami, Mitsuhisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42270

可能表現の文

村上 三寿

【はじめに】

動詞の「行ける・歩ける・買える・行かれる・食べられる・信じられる」のような形態論的な文法的なかたちは、動詞の〈可能のかたち（可能形）〉とよぶことができる。これらの動詞の〈可能のかたち〉を述語にする文は、「行くことができる・歩くことができる・買うことができる・食べることができる」などのような、語彙・構文的な手つづきによるものとともに、〈可能表現の文〉の体系をつくりあげている。可能表現の文は、文のタイプとしてみれば、「はなし手がものごとを確認してのべる」という〈ものがたり文（つたえる文・平叙文）〉のわくのなかにある。このわくのなかで、文の対象的な内容としての現実の世界のできごとを、そのリアリゼーションの観点からとらえて、「する」のかたちの〈現実表現の文〉・「することができる」のかたちの〈可能表現の文〉・「しなければならない」のかたちの〈必然表現の文〉の3つのタイプの文にわけてのべることができる。すなわち、はなし手は〈ものがたり文〉のわくのなかで、文のなかにうつしとる対象そのものの存在のし方にあわせて、〈現実のものとして〉・〈可能なものとして〉・〈必然的なものとして〉とらえながら、3つのタイプの文にわけて表現していることになる。

この報告は、奥田靖雄が〈可能表現の文〉の代表的なものとして、「することができる」を述語にする文をとりあげてのべていることに学びながら、形態論的な文法的なかたちとしての「行ける・歩ける・食べられる・信じられる」のような〈可能のかたち（可能形）〉を述語にする文について記述しているものである。奥田の論文に学びながら、おなじく、〈可能表現の文〉をとりあつかっているものであって、それをさらに先にすすめているとはとうてい思えな

いが、奥田が指摘しているように、『可能表現の文それ自体が、「はなせる・はなすことができる・はなしてもいい・はなしうる・はなすこともありうる」のような、ことなる手づつきで表現されるいくつかの文のセットであって、そのセットのなかで、それぞれの手づつきのことなる文が、みずからの存在を主張しながら、それぞれのことなる意味と機能をもっている』とすれば、可能表現の文の体系的な研究の段階のひとつとして、それらの文のセットのなかの手づつきのひとつである、形態論的な〈可能のかたち（可能形）〉を述語にする文を具体的な用例にもとづいて記述することにもいくらかの意味があるだろう。

（注）奥田は『ことばの科学（第1集）』（1986）のなかののせてある「現実・可能・必然（上）」のなかでは、文の対象的な内容としての現実の世界のできごとを、そのレアリゼーションの観点からとらえて、〈現実表現の文・可能表現の文・必然表現の文〉の3つのタイプにわけていくことについて、また、それらの体系的な研究のあり方について、この論文のまえがきにあたる(1)の部分で、その壮大な構想をきわめてダイナミックに、ていねいにかたっている。そのうえで、「することができる」を述語にする可能表現の文をひとつひとつ記述しながら、その意味と機能を詳細に検討している。

さらに、その10年後の『ことばの科学（第7集）』（1996）にのせてある「現実・可能・必然（中）」の論文へのみずからの解説のなかでは、「可能表現の文（上）」の記述に対してふりかえり、その文法的な意味をより正確に規定しながら、より整理したすがたをさしだしてくれている。

この報告は、奥田のこのふたつの論文にまなびながら、可能表現の文の体系をかたちづくっているひとつとして、動詞の形態論的な文法的なかたちである〈可能形〉を述語にするタイプの〈可能表現の文〉をとりあげて、構文論として、それらの意味と機能の記述的な研究をおこなっているものである。記述にあたっては、はじめに〈肯定のかたちのもの〉と〈否定のかたちのもの〉とにおおきくわけ、つぎに、それぞれをテンポラリティの観点から分類している。可能表現の文の文法的な意味の実現において、それらが〈アクチュアルな

可能や実現)をのべているのか、それとも〈ポテンシャルな可能性や能力〉をのべているのかということに対して、その時間性や時間的なありか限定のありなしが、おきくかかわってくるからである。さらに、分析にあたって、時間性(テンポラリティ)とともに考慮にいれているのは、人称性(パーソナリティ)である。文の文法的な意味としての〈モダリティ〉の実現にとって、文のテンポラリティとパーソナリティがきわめておおきな役わりをはたしているということは、この可能表現の文の意味的なタイプの研究においても例外ではない。また、はじめに〈肯定のかたちのもの〉と〈否定のかたちのもの〉とわけて記述するのは、可能表現の文の意味や機能の実現において、通達の場面構造のなかでのモーダルな意味あい、肯定文のばあいと否定文のばあいとでは、いくらかのちがいがみられるからである。

【1】肯定のかたちにおける可能表現の文

「行ける・すごせる・かよえる」のような、肯定形における可能表現の文においては、はなし手が現実の世界のものごとをどのようにとらえて、きき手にどのようにのべているのかということが、この種の文の文法的な意味を確認することになるのだろう。形態論的な文法的なかたちとしてみれば、動詞の可能のかたちが肯定形のとき、きわめてシンプルにいえば、〈その動作が可能である〉ことをのべる文法的なかたちであると言いきることもできる。そして、その文法的な意味をそのようにとらえたうえで、その可能のかたちを述語にする〈可能表現の文〉が、実際の言語活動の場面のなかでどのような意味と機能を実現しているかということが、構文論としての〈可能表現の文〉の研究の仕事内容である。すなわち、現実世界のできごとにおいて、はなし手がとらえてきき手に対してのべている、その〈可能〉ということのなかみを具体的にさぐることになる。

現実の世界のものごとを、そのレアリゼーション(実現性)の観点からとらえたときの〈可能のなかみ〉というものは、まずもって、はなし手がとらえ

る〈現実の世界のものごと〉それ自体の内容におおきくかかわっているだろう。つまり、はなし手が話題にしている〈ものごと・できごと〉が、特定の人間の具体的な時間のなかでの具体的な動作のことなのか、それとも、時間にはばられない一般的なこととしての動作なのか、その内容によって、その〈可能〉のもつ文法的な意味はことなってくるだろう。前者であれば、はなし手は、その人間の動作について、〈アクチュアルに可能であること〉としてとらえてのべることになるし、後者であれば、たんに〈ポテンシャルに可能性をもっていること〉としてのべることになる。こうして、可能表現の文における〈可能〉のふたつの文法的な意味〈アクチュアルな可能〉と〈ポテンシャルな可能〉は、できごとにおける〈時間的なありか限定のありなし〉によっておおきく規定されることになるだろう。そして、その〈時間的なありか限定〉があればあいであっても、それが、具体的に〈未来のことか・現在のことか・過去のことか〉によっても〈可能〉のもつ文法的な意味にちがいがでてくるだろう。

さらにそのうえで、この〈アクチュアルな可能〉と〈ポテンシャルな可能〉とのちがいのなかには、はなし手がとらえる現実の世界のできごとにおける動作の主体が、〈だれであるのか（1人称の人間か・2人称の人間か・3人称の人間か）〉、あるいは、〈特定の具体的な人間であるか〉〈不特定の一般的な人間であるか〉という人称性（パーソナリティ）の要素ともかかわりながら〈可能〉ということの文法的な意味を複合的なものにしていく。可能表現の文の意味的なタイプを体系的に記述していくということは、こういった要素をひとつひとつ確認しながら、通達の場面（はなしあいの構造）のなかでの意味・機能をタイプとして整理していくことでもある。

このようにとらえたうえで、この先の記述をひとまず時間的な観点からはじめて、可能表現の文の具体的な意味を検討していくことにする。

(1) 【現在・未来形（すぎさらずのかたち・非過去形） のばあい

現代日本語においては、動詞の形態論的な文法的なかたちとしてみれば、〈テンスのかたち〉は、過去形と非過去形のふたつにわけられるのだが、文の〈テンポラリティ〉として構文論的にみれば、この〈非過去形・すぎさらずのかたち〉をつかって、具体的な時間としての未来のできごとをのべたり、具体的な時間としての現在のできごとをのべたりする。また、ときには具体的な時間のありか限定のない一般的な時間のことがらをのべたりする。可能表現の文においても、おなじ形態論的な文法的なかたちを述語としながら、具体的な時間としての未来のできごとをのべたり、具体的な時間としての現在のできごとをのべたり、未来や現在のできごとでありながらも具体的な時間にしばられないことがらをのべたり、さらには、時間から解放された一般的なことがらとしてのべたりする。時間的なありか限定のありなし、時間における具体性と抽象性は、はなしあいの場面構造のなかでの可能表現の文のもつ文法的な意味と機能の実現にとって、おおきな要素となってはたらくことになる。

① 【未来のことがら】

- まったくなんというゆとりのある玄関でしょう。ここに堂本さんは一人で住むのだと思うと、急に、堂本さんがえらくなったような気がしてきました。その家へ今日もまたゆける……道子はほかのだれにも負けず、うきうきしていました。

(壺井栄)

- 連（つれ）は市村弁護士一人。もともと弁護士は有権者を訪問する為に忙（せわ）しいので、旅舎（やどや）で別れて、蓮太郎ばかりこの姫子沢へ丑松を尋ねにやって来た。都合あって演説会は催さない。したがってこの村で弁護士の政論を聞くことは出来ないが、そのかわり蓮太郎は丑松と

ゆっくり話せる。

(破戒)

- 店はたたむことにはなったが、俺は本当のところは、この仕事は失敗したとは思っていないんだ。そうだろう？初め、四人から五十万円ずつ集めた。ところが、明日この店の権利を売って、百六十万円はいる。一人に四十万円ずつ返してやれる。結局、彼等は、十万円ずつ損をするだけの話だ。今の時勢にすればたいした金じゃあない。(黒い喋)
- 夜が明けるとともに、本船から内火艇をおろす予定です。波はまだかなりありますが、B港まではいけるでしょう。内火艇を接岸させたいのですが、岸に近よると、岩礁があって、内火艇のスクリューが破壊されますから……(火の島)
- おかげさまで、本校のほうにかわらしていただきましたから、もう十日もしたら、バスにのって、かよえると思います。(二十四の瞳)
- 近くオー・ケーがとれますよ。新聞社の方の押しが効を奏したか、マタさんの顔が物を言ったか判らないが、とにかく外務省詰の記者が今日僕のところへやって来ましてね、近くムラビヨフの入国ビザが下りるらしいと言うんです。今夜は一杯やって下さいよ。僕の方もこれから祝盃をあげます。(黒い喋)
- コロボックンクルが帰って行きますとクシベシは、さあ、これからは心配なしに遊んで暮せる、と独言を言いながら、ごろりと腕枕をしてその場に寝てしまいました。(赤い鳥)
- このごろ読んでいるのは三河風土記である。これはだいが冊数が多いから、当分この本だけで楽しめるといっている。(雁)

これらの例のように、個別の具体的な人間の具体的な時間としての未来のできごとについてのべているばあいには、その〈可能のかたち〉は、その具体的な未来の時間帯において〈その動作を実行すること・遂行することが可能である〉ということのをべている。つまり、その具体的な未来のできごとを、実現性というレアリゼーションの観点からみて（すなわち、可能性というフィルターを通したうで）、その〈動作の実現が可能である〉と判断してのべている。この種の文では、はなし手は何らかの根拠にもとづいて、きき手に対して、その動作の実行やものごとの実現が〈実際に可能である〉こととしてのべている。これは、具体的な未来の時間帯におけるできごとの実現に対して〈アクチュアルに可能である〉という判断である。主語が1人称の具体的な人間であれば、〈自分自身の未来の動作の実現が可能である〉という判断のをべることになるし、2人称や3人称の人間のできごとであれば、〈その人間の未来の動作の実現が可能である〉というはなし手の判断のをべることになる。

また、その〈可能である〉というはなし手による判断は、一定の条件がすでにととのっているという根拠のもとになされているのだが、それらは、文の構造のなかに・文脈のなかに・はなしあいの構造のなかに、もとめることができるだろう。つぎの例もおなじである。

- 「これだ」と彼は外套の袖を津田に突き付けるようにして見せた。「有難う、お蔭でこの冬も生きて行かれるよ」
(明暗下)
- 双葉の山が右手にぼんやり見えた。クラゲ雲はもう見えなかった。「おい、助かったぞ。生きられるぞ、生きられるぞ」と僕は、活気づけに声をかけた。
(黒い雨)
- 「そうです。わたしにもそうらしく思われて来ました。逃げて都へも往かれます。お父う様やお母あ様にも逢われます。姉えさんのお迎にも来られます。厨子王の目が姉と同じ様に赫（かがや）いて来た。
(森鷗外)

- 丑松、へえ最早（もう）これで安心だ。是処（ここ）まで漕付ければ、最早大丈夫だ。どのくれえ、まあ、俺も心配したろう。ああ今夜からは三人で安気に寝られる。 (破戒)

これらの例における〈可能〉であるという判断は、その判断の根拠となる条件がととのって、その条件を根拠にしてなされているのだが、その〈可能〉となるための条件がまだ完全にととのっているわけではなく、その条件となるできごとが実現することによって、可能になるということのをべる場合もある。そういった場合には、その〈可能〉であるという判断は、〈条件がととのう〉という前提のうえにそれが可能であるというはなし手の判断をきき手に対してのべることになる。

- ……それを思うとはっきりと片をつけて出て行くあなたが羨ましいわ
……岩本さんと結婚すれば、赤ちゃんも出来るでしょうし、それこそ誰に気兼ねもなしに天下晴れて世の中を歩けるんですもの…… (女坂)
- 西国へ往くまでには、どれ程の難所があるか知れない。それとは違って、船路は安全なものである。慥(たしか)な船頭にさえ頼めば、いながらにして百里でも千里でも行かれる。 (森鷗外)
- 初音町の家を出るまで、苛立つようであった純一の心が、いよいよこれで汽車にさえ乗れば、箱根に行かれるのだと思うと同時に、差していた汐の引くようにずと静まって来た。 (青年)
- 小萩は伊勢から売られて来たので、故郷からこの土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむずかしいし、引き返して佐渡へ話たるのも、たやすいことではないけれど都へはきつと往かれます。 (森鷗外)

- ちょっと千葉へゆかなくてはならない事になったのだ。話がうまく運べば、あすのうちに帰って来られるのだが、どうかするとあさってになるかもしれない。 (雁)
- 「ね、いいでしょう、初め田舎からみっちり修業してかかれば、いつだって東京へ帰れるじゃないの、お姉さんも一緒にやらない。」 (放浪記)
- ……私がここへ来ない日には、正枝さんの家へあなたが来てよ。ねえ、どうせあなたは夜一度は新宿へゆくのでしょうか。正枝さんの家は帰り道にちょっと廻ればすむのでしょうか。そうすれば私はそれを目あてに自分を抑えていられるわ。 (くれない)
- だがいつもより優しく、「ね、だから、すこし我慢をして机に向いなさい。そうすれば書けるよ。」 (くれない)
- 済まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思ったのだ。笛を切ったら、すぐ死ねるだろうと思ったが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思って、力いっぱい押し込むと、横へすべってしまった。 (森鷗外)

これらの例のばあいも、個別の人間の具体的なこれからのできごとについて、条件つきであるにしても、何らかの根拠や見とおしをもちながら、その動作が可能であるという判断をのべているということでは、未来の動作の実現に対して〈アクチュアルに実現可能なこと〉としてのべている。しかし、その未来という時間帯にひろがりがあり、動作のし手が一般性をおびたりすることによって、〈アクチュアルな可能〉から〈ポテンシャルな可能〉の意味へとうつついていくことになる。しかし、具体的な未来の特定の時間におけるその動作の実現が可能であるという、はなし手のはっきりした判断がのべられているのか、ポテンシャルなこととして可能性をもっているということを単にのべてい

るのか、はっきりとした線引きをすることはむずかしいことでもある。

- 「じゃ、仮にそう信じるとして、ぼくはいつ、どこへいけば座敷わらしに会えるの?」「だから、さっきもいうたように、満月の晩に、どっしりした大黒柱のある古い家にいれば会えるんじゃない。たとえば、ここの家の離れみたいところにな」寅吉じいさんがそういうので、ぼくはびっくりした。
(ユタとふしぎな仲間たち)
- ほんとに民さん、元気をお直しよ。そんなにくよくよおしでないよ。僕は学校へ行ったて千葉だもの、盆正月の外にも来ようと思えば土曜の晩かけて日曜に来られるさ……
(野菊の墓)
- あのひとも寝ぶそくな目をさせて波止場へ降りてきてくれていた。「体が元気だったら、又いつか会えるからね。」そんなことを小さい声で云った。
(放浪記)
- 小さな大吉の村からも幾人かの少年航空兵が出た。航空兵になったら、ぜんざいが腹いっぱい食える。かわいそうに、年端もいかぬ少年の心を、腹いっぱいのぜんざいでとらえ、航空兵をころごせ…… (二十四の瞳)
- 「御前が中学を出て、もっと上の学校へはいるぐらいまでは生きていたもんじゃ」「お酒を飲まんといれば生きられる」「酒飲まんて生きたいとは思わん。酒飲めんなら、あすにでも死ぬわな」
(しろばんば)
- 彼の長兄が、最近伍長になって帰ったことが正をそそのかしたのだ。「下士官を志望したら、曹長までは平ちゃらでなれるいうもん。下士官は月給もらえるんど。」
(二十四の瞳)
- 「自分を生活の心棒と思わないで、綺麗に投げ出したら、もっと楽にな

れるよ」と私が又兄さんに云いました。 (行人)

• 「梅雨が明けたら、また会えるんだろう?」「もちろんさ、会いたかったら、梅雨が明けたあくる日の午（ひる）ごろ、谷川のどンドン淵のところへくればいい」 (ユタとふしぎな仲間たち)

• 「そうはゆかない。淋しい島だよ。第一、君は、そんなところで、五六年も暮らせる人じゃない。一年に一度位は東京へ来られるだろうから、その時は、また逢えるが、当分、出来るかどうか判らないが、山の中へ這入ってみたいんだ」 (浮雲)

• 「おやまあ、あんた質屋さんになるの?」「いえ、質屋の番頭です。兵隊までつとめたら、番頭になれるいいました」 (二十四の瞳)

• 「酒を呑んで胃病の虫を殺せば、飯なんかすぐ喰える。呑まなくっちゃ駄目だ」三沢は 自暴（やけ）に酔った揚句、乱暴な言葉まで使って女に酒を強いた (行人)

• ジ……と歯を嚙むようなミシンの音がしている。「六十円もあれば、二人で結構暮せると思うんです。貴女の冷たい心が淋しすぎる。」 (放浪記)

• 「さあ……、うちがいよいよゆきつまって、お米も買えないなんて時、五十銭あったら、一週間はくらせるわよ。」 (坪田譲治)

• 一体貴方はあんまり研究者だから駄目ね。学問をするには研究が必要かも知れないけれども、交際に研究は禁物よ。あなたがその癖を已（や）めると、もっと人好のする好い男になれるんだけど」 (明暗)

• 人間はそうしたものではない。腰が起（た）てば、歩いて捜す。病気に

なれば寝ていて待つ。神仏の加護があれば敵にはいつか逢われる。歩いて行き合うかもしれぬが、寝ている所へ…… (森鷗外)

未来のできごとに対するこういったはなし手の判断は、時間的にありか限定がなされ、さらに個別具体的であれば、その動作やものごとの実現が〈アクチュアルに可能である〉というはっきりした判断がのべられることになるが、時間的なありか限定性がうすれてきたり、できごとの具体性がかけて抽象的になるにしたがって、動作やものごとの実現に対する〈ポテンシャルな可能性〉としての判断がのべられることになるだろう。おなじく、動詞の〈可能形〉という文法的なかたちによつてのべられる可能表現の文において、はなし手がきき手に対してのべる未来のその動作の実現が〈アクチュアルな可能〉としての判断なのか、一般的な〈ポテンシャルな可能性〉としての判断なのかは、こういった時間的なありか限定性や主体の個別性や動作の具体性にかかわってくることなのだろう。

しかし、実際のはなしあいの場合構造のなかでの可能表現の文のもつ、その〈意味あい〉ということになれば、こういった客観的なものばかりできまってくるわけではないだろう。

- ・ 母 そんなことありませんよ。どこのおかあさんでも、はじめは赤ん坊で、それから子どもになって、それから娘さんになって、それからお嫁にいて、それから子どもをうんで、そして、おかあさんになるのさ。

三男 (じぶんの腕を見て) ぼく、おとなになれるかしら。ぼく、おとなにならないよ。そんな気がするんだもの。

母 なれますよ。いまに、大きくじょうぶになりますよ。

(新美南吉)

この例では、客観的にひとりの人間の未来のことについてかたっていると思えば、ごくふつうには〈ポテンシャルな可能〉として、そういう可能性がそ

なわっていることをのべている文ということになるだろう。しかし、実際には、この例では、はなし手はこの可能表現の文をつかって、〈その実現が可能なのだ〉というまさしく未来における〈アクチュアルに可能なこと〉として、はなし手の判断をきき手に対して強くのべている。そして、この〈実現が可能である〉という判断の表現は、はなし手の単なる判断ではなく、現実表現の文による確信的ないいきりをうしろにつけたしながら、おもい病のなかで気が弱くなっている我が子に対する〈つよいはげまし〉と、その子をまえにした母であるはなし手自身に対する〈つよい言いきかせ〉の意味あいを実際的なものとしてふくみもっている。

実際のシチュエーションのなかでつかわれる可能表現の文において、その対象的な内容が未来のことにかかわっているとき、それが具体的に〈アクチュアルに実現可能である〉というはなし手の判断をのべているのか、一般的に〈ポテンシャルな可能性をもっている〉ということのをべていることなのか、その文の文法的な意味を確定するには、その文がどういう〈はなしあいの構造〉のなかに存在しているのか考えていく必要があるのだろう。そういった意味では、プラグマチカの領域のなかでの問題でもある。

- 宿屋にはとまらず、三食分の弁当をもってゆくということで、ようやく父兄のさんせいを得た。それでも二組あわせて八十人の生徒のうち、行けるというのは六割だった。
(二十四の瞳)
- 富岡は、興味もなく、その新聞を枕もとに放り出して、大きなあくびをした。ゆき子は白いカーテンの、汚れた汚点をじいっと見ていた。富岡はこのままあの部屋へ戻ってゆけるのだが、自分は何処(どこ)へも戻れないのだと思うと、心細くなり、朝の黄ろい光を受けて、ゆき子は、自分の手を蒲団から出して眺(なが)めていた。
(浮雲)
- 金を持って、逃げ出してきた情熱を判って貰えないとすれば、自分の今朝の考えは、浅はかなものであつたらうか……。どうせ、富岡と一緒に

なったところで、うまくゆけるとは思わなかったが、ゆき子は、富岡を手放す気にはなれなかった。(浮雲)

- 案内人は、まだ、長々と説明をやめなかったが、ゆき子は、そんなに長く日本人が何十年も、この仏印の土地に住みつけるとは思えなかった。いまに、何かの形で、ひどい報いが来るような気もして来る。(浮雲)
- 太郎左衛門も加えて一行は、すぐその場から出発した。家へそのことをいってきようなどと思うものは、ひとりもなかった。なにしろ、からだはつばめのようにかるかった。つばめのように飛んでいって、つばめのように飛んで帰れると思っていたのである。(新美南吉)

また、その動作の実行・実現を可能にするための条件としての〈根拠〉それ自体が非リアルなものであれば、その〈可能性〉もまた、アクチュアルなものとして実現することのない空想にしかすぎないものとなる。これらの文における〈可能性〉は、もはやポテンシャルとはいえない。いわゆる〈反実仮想〉ということになる。この種の〈可能表現の文〉は、実現の可能性のない〈はなし手の願望・ねがい・夢想・ゆめ〉の意味を表現することになる。

- 何と小さな人間たちよ。ビルディングを見上げると、お前なんか一人生きてたって、死んだって同じじゃないかといっているようだ。だけど、あのビルディングを売ったら、お米も間代も一生ははらえて、古里に長い電報が打てるだろう。(放浪記)
- だまっていようか。しかしそしたらこの残りのお金をどうしよう。これが自分の金だったら、健介の三りん車も買えるんだけどな。自分のものにする方法はないものだろうか。しかし、それではどろぼうと同じではないか……(壺井栄)

• 「くに（故郷）は、まだこんなわけにはいかない。」と、おじいさんは、何か考えていられました。「もう少し、近ければ、時々いらっしやるんですが。」（小川未明）

• 美濃田の番頭が、「月賦でも革ミシンを買いなさると、もっと沢山仕事を出せるんですがねえ」と云った事を考えて、何だか、もう、自分の道もなくなりそうな心細さを感じた。（林芙美子）

未来のものごとに対する〈可能表現の文〉がたずねる文であるときには、はなし手の〈実現の可能性に対する疑問〉をさしだすことになるのだが、その疑問の内容も、未来の具体的な動作について〈アクチュアルなものとして実現が可能か〉ということの単純なたずねであったり、〈ポテンシャルな可能性〉を問うものであったり、実現の可能性について、その具体的な時間への疑問であったり、実現を条件づける方法へのたずねであったり、あるいは、実現そのものに対する懸念や不安のさしだしであったりするだろう。

• お母さんが部屋の外から、「弘（ひろ）ちゃん、お腹がすいてるなら、なべやきうどんでもとってあげようか、それとも、もうじき晩ごはんだけど、まてる？」とさっきとはちがって、やさしく言いました。（赤い鳥）

• 「どうだね、今日、このまま伊香保か、日光の方へでも行ってみる気はないかね？」「まア、伊香保って、私、行った事ないけど、いいわねえ……。ざぶざぶ熱いお湯にはいたいわ。本当に行けるの？」「一泊か二泊位なら行ける。行ってみるかい？」（浮雲）

• 水が温（ぬる）み、草が萌える頃になった。あすからは外の為事（しごと）が始まると云う日に、二郎が邸を見廻る序（ついで）に、三の木戸の小屋に來た。「どうじゃな。あす為事に出られるかな。大勢の人の中には病気でおるものもある。奴頭（やっこがしら）の話を知ればかりではわから

ぬから、きょうは小屋々々を皆見て廻ったのじゃ」 (森鷗外)

- 息子の女の家へ行くのに、信吾は重苦しい躊躇があった。妊娠しているというのを、初めて会って、産まないでくれなどと切り出せるだろうか。

(山の音)

- 菊子はさとへ来て泊っていることを、少し改まった様子で信吾にわびた。信吾はあいさつに困って、「もう鎌倉へ帰れるの?」とだけ、やさしく言った。「はい。」菊子は素直にうなずいて、「帰りたいですの。」

(山の音)

- 彼らは顔を見合せた。「よろしくたあ、久しぶりで娑婆（しゃば）の匂いを嗅いだような気がするな。誰も連れてってやるっていったわけじゃねえぜ。おめえ、病人だろう。随（つ）いて来られるのか」「できるだけやってみます」

(野火)

- 「だけどね、明子さん。」岸子は、又二人に戻るといように、表情を解いて、「あなた、広介さんと別れて、あとはどうする？独りでいられる?」明子は、はっとしたように顔を上げた。

(くれない)

- そういえば、あの呪文のほかにも、訊いておきたいことがまだまだたくさんあったのだ。なによりも、こんどはいつ会えるのか、急に会いたくなったときはどういう方法で連絡すればいいのか、それを訊き洩（も）らしたことが残念でならなかった。

(ユタとふしぎな仲間たち)

- 「僕は岸本君のためにシャンパンを抜こうと思って待ち構えているんだけど何時（いつ）になったら飲めることやら見当がつかない」と岸本の前に腰掛けていた画家が親しげな調子で言って笑った。

(新生)

- 蓮太郎は細君を連れて一步（ひとあし）先へ出掛けた。「ああ何時（いつ）復た先生に御目に懸（かか）れるやら」こう独語（ひとりごと）のように言って、丑松も見送りながら随いて行った。（破戒）
- 久原花子は奇妙な声をあげて、「ああア何時（いつ）になったら、こんな学校から出られるんかしら……」と両手を頭の上で輪にして弓のように伸びをしながら嘆息をした。（林芙美子）
- 戸の外は霜の晩であった。提灯（ちょうちん）を持って、拍子木を敲（たた）いて来る夜廻（よまわり）の爺いさんに、お奉行様の所へはどう往ったら往かれようと、いちがたずねた。（森鷗外）
- 「男らしくするとは？どうすれば男らしくなれるんですか」「貴方の未練を晴すだけでさあね。分り切ってるじゃありませんか」（明暗）
- 「うん」洪作は、併し、食べたものを訊かれたら、それを最後まで黙っていられるか、どうか、甚だ不安なものを感じていた。訊かれたらみんな喋ってしまいそうであった。（しろばんば）
- 「山の中へ這入って働くより方法もないところだね。官舎も、昨日見て来たが、君一人でいられるかどうかだ……。僕が、山へ這入ってしまえば、一週間位は、留守になっちまうンだけ……」「私も、山へいけないの？」（浮雲）
- 立派に息の根をとめる事が出来るものであろうか、どうかを、考えている。女を殺して、その後から、うまく、自分も死ねるものであろうかどうかを、富岡は数字のように計算をしていた。愛しあって死ねるわけのものではないかという事を、自分の死んだあととは、誰も判ってはくれないだろう……。 （浮雲）

②【現在のことがら】

未来のできごとについて〈可能表現の文〉でのべているばあいには、それが具体的な人間の、ある程度時間的なありか限定のあるなかでのできごとであれば、〈その動作の実現が可能である〉という判断がのべられる。未来の動作についての〈アクチュアルに実現可能である〉という判断である。しかし、現在のできごとについて〈可能表現の文〉でのべられるばあいには、〈可能である〉という判断ではなく、具体的な人間の知覚活動や認識活動や心理活動が〈いま実現している・実現が成立している〉ということが〈確認〉としてのべられる。1人称のはなし手自身のことであれば、自分の知覚や認識や心理が実現していることをかたることになるし、2人称や3人称の具体的な人間のことであれば、その人間の知覚や認識や心理が実現していることをはなし手が〈確認〉していることとしてのべることになる。

- それに往きには高柳一人であったのが、帰りには若い細君らしい女と二人連。女は、薄色縮緬（うすいろちりめん）のお高祖（こそ）を眉深（まぶか）に冠ったまま、丑松の腰掛けている側を通り過ぎた。新しい艶のある吾妻袍衣（あずまコート）に身を包んだその婀娜（すなり）とした後姿を見ると、この女が誰であるかは直に読める。（破戒）
- 所詮無垢の身体にかえれぬ以上どういう処置をして下さるか、近日出向いて御意向を伺うつもりであるという文意で言葉は懇懇であるが詰問の調子がありありと読みとれる。（女坂）
- 倫は、須賀の踊っている様子に眼をやっているのだったが、耳に入って来る話の中で、母親の慈愛の深そうな様子など今までのどの話よりも、じっくり溶けこめるのだった。（女坂）
- しかしぼくは、大学にいつているぼくのにいさんの話が、いちばん信じ

られるのだ。にいさんはこういった。「それはきっと、ごんごん鳴るので、はじめにだれかが、ごんごん鐘といったのさ。ごんごん鐘ごんごん鐘といっているうちに、だれかがいいちがえて、ごんごろ鐘といっちゃったんだ。……」
(新美南吉)

- 四方の石がきにはこけがいっぱいについて、石の色はすこしも見えない。つまり、この一升ますのような形の池は、なにからなにまで緑色である。そして水の中には、こいがいるらしい。ところどころ、水の緑色の中に、ぼんやりした赤や、白がみとめられるのは、たしかにそれだ。
(新美南吉)

- 「おかしな顔か」「見たこともない顔だな、それが恐怖の顔だとしたら、おれもいささか、自信が持てる、八さんも、おれも人並に、恐怖しているのだということが分っただけで、いくらかほっとした。
(火の島)

- 老人は或はそれを披露する気で、呼んだのかも知れないが、代助の態度を見て、もう少し控えて置く方が得策だという料簡(りょうけん)を起した結果、故意(わざ)と話題を避けたとも取れる。
(それから)
- たつみ屋や相田の姿が、こんなにはっきり思い出せるのに、おなじ夢で触れた娘は、姿も覚えていず、誰かもわからないのは、なぜであろう。
(山の音)

- そうしてその矛盾も兄さんには能く呑み込めているのです。
(行人)

これらの〈可能表現の文〉では、未来のできごとについての〈実現の可能性〉に対する判断がのべられているわけではない。目の前のできごとに対する認識や知覚や心理が〈いま実現している〉こととしてのべられている。これらの文では、何らかのものごとに対する認識や知覚や心理活動が〈実現が可能で

ある」という判断としてではなく、いま現在、それが〈実現しているもの〉として〈可能のかたち〉がさしだしている。

つぎ例では、おなじく現在のできごとであるが、いくらか時間的なひろがりのあるなかでの人間の動作や活動がさしだされている。ここではその遂行を可能にするための何らかの〈条件〉や〈能力〉がそなわっているために、いま実現していることをあらわしている。動作や活動の〈実現が可能である〉という判断ではなく、それが一定の時間のはばをもっているいま現在において〈実現している〉ことをのべている。

- 由美の姉でこれも夫に死別した不幸な未亡人だが、今ではこのしんが居てくれるので、由美はまだ小学校へ行っている下の娘をおいて出稽古に出られるのである。 (女坂)
- 「ほんとうに考えてみると、お須賀さんと私とは何かの縁でつながっているのね。こうして十年もお妾といわれる境涯で旦那様一人のお世話をして来て喧嘩もせず仲よくいられるなんて、珍しいことだわね。きっと……前世は姉妹だったのかも知れないわ」 (女坂)
- おら、婆さまと二人ぎりだで、いまのままのきこりでけっこうおまんま喰えるだでなあ。 (木下順二)
- この光景（ありさま）を見た時は、叔父も笑えば、丑松も笑った。こういう可愛い相手があればこそ、寂しい山奥に住まわれもするのだと、人々も一緒になって笑った。 (破戒)

こういった現在における動作や活動の〈実現〉を確認することそれ自体としてみれば、〈可能のかたち〉でなくても、〈稽古に出ている・仲よくしている・おまんま喰っている・住んでいる〉のように、〈する〉のかたちでとらえてのべることもできるだろう。しかし、これらの例のように、現在における実

現を〈可能のかたち〉でのべているばあいには、その実現をレアリゼーションの観点からとらえて、実現しない可能性もあるなかで、〈何らかの条件や能力がそなわったことによって実現にこぎつけている〉こととして確認してのべていることになるのだろう。現在における動作や活動の実現の〈可能形による確認〉というのは、やはり現実世界をレアリゼーションの観点にすえながら、〈実現のための何らかの条件や能力〉の存在のありなしを考慮にいれ、それを前提にしたうえで可能であるという確認である。

未来の具体的な時間における具体的な動作であれば、その可能表現の文は、その動作の実現が可能であるという判断をのべるのであるが、これらの例のように、現在のものごとについて可能のかたちをつかっているときには、それは、具体的な個々の動作ではなく、ある程度の時間のはばのなかでの抽象的な活動としてとらえ〈それが実現している〉ことをのべる、すなわち〈実現の状態にある〉ことをあらわす。

つぎの例では、実現しているのは、具体的な動作ではなく、ものごとに対する態度や心理的な状態である。

- 女中という位置のせいだろう。ひとごととして一歩さがったところから気楽に見ていられるのだし、気楽だからこそかえって身にしみじみと、瀬にかかったざわざわどうどうというめまぐるしさがよくわかって同情している。 (流れる)
- ゴムボートの整備という仕事に、一縷 (いちる) の生きる道を発見したように、すさまじいばかりの熱意で整備が進められているのを見ながら、彼が他の人達よりも幾分か落ちついておられるのは、やはり一週間前からの恐怖の予告のおかげであるだろうと考えていた。 (火の島)
- 「…… どうもしなくたっていいじゃないか。天下は太平無事だ。」「それ

はあなたは太平楽を云っていられますでしょう。わたしさえどうにかなっ
てしまえばいいのだから。」（雁）

- けれどもこういう霊妙な手腕を有っている彼女であればこそ、あの兄に
対して始終ああ高を括（くく）っていられるのだと思った。（行人）
- 「僕にそんな力があるものか」と、思いも寄らない私は断るのです。「い
やある。君は実行的に生れた人だ。だから幸福なんだ。そう落付いていら
れるんだ」と兄さんが繰り返すのです。（行人）
- 「まあ！何て、怖い事を云うのよ、貴方ってひとは……。私に、ここで
死んでみせろって云ってるみたいね……。私が自分の人生を歩むのだった
ら、もうとっくに、貴方には逢ってはいないわ。それ、でも、貴方の本当
の気持ちなんでしょうね。私に飽きてしまったから、本当のことを云える
ンでしょうね……。」（浮雲）
- うちのおかあさんが妙貞さんを信じているように私はおかあさんを信
じ、尊敬しているわ。そしてほんとうのおかあさんと思っていられるの
を、ありがたいと思っているのよ。（壺井栄）

抽象的な活動や心理的な状態や態度ではなく、具体的な動作を〈現在の可
能表現の文〉でとらえるとき、それは、現在の〈具体的な動作の実現〉として
とらえるばかりでなく、動作が〈実現の状態にあること〉から、さらに〈実現
の可能性をかくとくしていること〉、〈実現の能力がそなわってきた〉という特
性の表現へとうつっていくことになるだろう。

- 「俺も永松のおかげで、ここまで来たが、どうもこれから先は自信がね
え。」「自信なんかある奴はないだろう。でもその足じゃ大変だな」「永松
が肩をかしてくれるんで、ぼつぼつ行けるんだ」（野火）

- 「その紙幣（さつ）は三枚共、僕が今その男から貰ったんだ。貰い立てのほやほやなんだ」「じゃ猶どうも……」「猶どうもじゃない。だからだ。だから僕も安々と遣れるんだから、君も安々と取れるんだ」（明暗）
- 馬鹿げた朗かさで、ドン・キホーテの真似をする事も面白い。二三次乗っているうちにペダルが足につい来て、するするとハンドルでかじが取れるようになった。（放浪記）
- そのうちに、また、春がきました。おじいさんは、からだに、ふるえがくるような病気にかかって、さむいあいだ、しばらく床にねていましたが、また、もちなおして、このごろ、そとにでられるようになっていました。（浜田広介）
- 太郎は長いあいだ、病気でふしていましたが、ようやく床からはなれて出られるようになりました。けれどまだ三月の末で、朝と晩には寒いことがありました（小川未明）
- おかあさんにしっかり抱きつきます。そしてまたかけだしました。なんとうれしいことでしょう。こんなに遠くへ来られるようになりました。こんなに遠くへ来ても、おかあさんほどこへもいきません。でもおかあさんがいなくなったら、大へんです。ようじんしないではいられません。（坪田譲治）
- ここに来てからもう半年近くになるのですが、そしてここでは比較的焦燥は少なかったのですが、今やとある程度に風景画を描けるようになりました。（くれない）
- 熱心だったので一年もすると、巳之助は、尋常科を卒業した村人のだれにも負けなくらい読めるようになった。そして、巳之助は、書物を読む

ことをおぼえた。

(新美南吉)

- 「先生!」「僕知っています!」「わたし読めます!」挙げた手を打ち振るようにして、そんな風に騒がしくわめき立つ生徒を、一段高い所から見下ろしていた先生は、しばらく、黙って、窓の外の青葉の照り返しを半面に受けながら、にこにここと笑っておりましたが、…… (赤い鳥)

このように、可能表現の文は、未来のできごとであれば〈動作の実現が可能である〉という判断をのべているのだが、現在のできごとであれば〈いま現在、動作が実現している〉ということへの認識や確認をのべている。しかし、〈動作の実現〉を認識したり確認したりしてのべること自体は、「する・している」を述語にする〈現実表現の文〉によつてものべることができる。そのようなばあいには、はなし手があえて、〈可能表現の文〉によつて〈動作の実現〉をのべるとすれば、その認識のし方や確認のし方にちがいがあろう。あるいは、より正確に言えば、その実現しているできごとそれ自体の、実現にいたるまでの状況や背景や前提にちがいがあって、そのことが、はなし手の確認のし方のちがいとしてあらわれ、〈現実表現の文〉と〈可能表現の文〉というのべ方の選択となるのだろう。

単に、現実の世界のできごとの存在として、動作の実現を確認してのべるならば、「する・している」のかたちで十分である。わざわざ〈可能のかたち〉をつかつてのべるといふことのなかには、その動作の実現を〈可能性・実現性〉というレアリゼーションの観点からとらえたうえで、アクチュアルなものとして実現しているという認識のうえにたつてのべている。したがって、その実現は、〈実現しない可能性もありうる状況での実現〉であったり、あるいは、いままで実現することのできなかつたことが〈条件や能力がととのつたことによつて実現にこぎつけた〉ということであったりする。〈可能表現の文〉における動作の実現ののべ方のなかには、そのような実現にいたるまでの状況や背景や前提に対する認識のし方も、この種の文のもつ意味あいとしてふくまれているのだろう。

はなし手のこのような認識のし方における意味あい、きき手に対する〈のべ方や態度〉としてもあらわれてくる。つぎのような例においては、そのできごとが〈実現すること〉に対して、はなし手が否定的な見解や認識をもっていたり、あるいは、むしろ〈実現させないことの方が当然だ〉というはなし手の想定や認識があるなかで、そのできごとが実現されたばあいに、それを実現させていることへの批判や詰問がこめられることになる。

• 「変な事を言うなあ。何がわかったのだい。」さも意外な事に遭遇したというような調子で、声はいたわるように優しい。「ひどいじゃありませんか。よくそんなにしらばっくれている事ね。」夫の落ち着いているのが、かえって強い刺激のようにきくので、上（かみ）さんは声が切れぎれになって、……（雁）

• ペドロは、面白くなさそうに舌うちした。「明日から長雨がはじまるっていうのに、よく笑ってなんかいられるもんだな。おれはおめえが羨（うらや）ましいよ。おれなんか、憂鬱で、もう、にこりともしたくねえ」（ユタとふしぎな仲間たち）

• 「品子。」波子はきびしく、品子を呼んだ。そして、矢木に言った。「子供にどうしてそんなひどいことが、おっしゃれますの？」（舞姫）

• 不思議な事には、渡辺は人を待っているという心持が少しもしない。その待っている人が誰であろうと、殆ど構わない位である。あの花籠の向うにどんな顔が現れて来ようとも、殆ど構わない位である。渡辺はなぜこんな冷澹（れいたん）な心持になつていられるかと、自ら疑うのである。（森鷗外）

また、つぎのようなたずねのかたちの〈可能表現の文〉では、否定的な反語として〈その実現は不可能である〉という見解や認識の意味あいをのべてい

る。

- 少し酔っぱらったときなど、そんな呑気そうなことをいうお父さんでした。しかし、お父さんだとて屑屋で満足していたわけではありません。まして若い堂本さんが、どうしてそんな気になれましょう。堂本さんはそのあとも毎日職業安定所へ通いました。(壺井栄)
- 父や継母と一緒に暮らしたことがなく、愛情も感じていないものが、どうしてその母が産み、別の家で別れて育って来た弟や妹に親身の兄らしい愛情を持てるだろうか。(女坂)
- すると、座敷わらしは目をむいた。「ばかをいえ、今夜は、おれは案内人で、おめえはお客だ。お客が乗るところに、案内人のおれがふんぞりかえっておられるか」(ユタとふしぎな仲間たち)
- 「まことに、すみません。どうぞ、すこし戸をお開け下さい。戸の外に立っている男は、あわれげな声を出して訴えました。「馬鹿を言っている。このあらしに、戸が開けられるものか。用があったら、ささとそこで言ったがいい。」と、父親は、言いました。(小川未明)
- 津田は高(たか)がこれしきの事にと考えた。後悔などとは思っても寄らなかった。「僕の詫様(わびよう)が空々しいとでも云うのかね、なんぼ僕が金を欲しがらったって、これでも一人(いちにん)前の男だよ。そうぺこぺこ頭が下げられるものか、考えても御覧な。(明暗)
- 富岡は、ダラットだとか、中国人の別荘だとかは、いまではどうでもよくなっていた。覚えているならば、その後は貴方が語ってくれと云わぬばかりのゆき子の甘さが、富岡には不快でもあった。そんな昔の夢はどうでもいいのだ。そんな夢にすがってなんかいられるものか……。(浮雲)

③【一般化された時間におけることがら】

未来や現在の具体的な時間における、特定の人間の具体的な動作や活動について可能表現の文でのべられるばあい、未来であれば〈その動作や活動の実現が可能である〉という判断がのべられ、現在であれば〈いま現在その動作や活動が実現している〉という確認や認識がのべられ、いずれも〈アクチュアルな可能〉として可能のかたちがつかわれていることになる。そして、未来と現在のいずれのばあいにも、その〈アクチュアルな可能〉は、ある条件がととのっているために、あるいは、ある条件をそろえさえすれば、という〈条件にささえられた可能〉と、能力がそなわっているためにという〈能力にささえられた可能〉とがある。

しかし、特定の人間の具体的な動作や活動であっても、時間のありか限定がないばあいには、その可能表現の文は、その動作や活動の〈実現の可能性〉を一般的にかたっていることになるだろう。すなわち〈ポテンシャルな可能〉をのべることになる。

- この不様な身なりは、「じだらくに居れば涼しき二階かな。」で、東京の殊に暑さの甚しい季節には最も適合している。朦朧（もうろう）円タクの運転手と同じようなこの風をしていれば、道の上と云わず電車の中といわず何処でも好きな処へ啖唾（たんつば）も吐けるし、煙草の吸殻、マッチの燃残り、紙屑、バナナの皮も捨てられる。（溍東綺談）
- なぜなら、亮子は安田の妻だから「代理」になれます。つまり、佐山は安田が来るのを待っていたのです。だから彼は亮子が安田の代理で来た、
と言え、すぐに出かけられるわけです。（点と線）
- 休みの日になると白川は取りまきの部下や料理屋の女将をつれて、須賀と二人飯坂の温泉場へ出かけて行った。そこでは、須賀は皆から「御新造

さま」と呼ばれ、誰れに気を置くこともなく白川に甘えられるので、温泉行きから帰って来るごとに、須賀は少しずつ開いてゆく花卉の多い牡丹のように、色と匂いを増して行き、初めのころの小間使らしい可憐な憶病さとは人の変ったようになった。(女坂)

- どうかするとその彼の背後へ来て、彼を羽翅で抱締めるようにして、親しげに顔を寄せるものがある。それが彼の妻だ。園子はその頃から夫の書齋を恐れなかった。画家のアトリエというよりは、寧ろ科学者の実験室のように冷く厳肅（おごそか）なものとして置いた書齋の中に、そうして忸々（なれなれ）しくいられることを、彼女は夢のようにすら楽しく思うらしかった。(新生 上)

- 「ごめん下さい。」と、勝手口からおとずれて、ほどのよい笑顔で、ほんの少しでも人より高く買い、あっさりと商売をしてゆけば、大ていお得意様はとれるというのが、道子のお父さんの教えた屑屋のひけつでした。(壺井栄)

- 「ね、おかあさん、長ぐつ、ほしいな。長ぐつだとじゃぶじゃぶ歩けるんだけど、あしだなんて、ころびそうで、あぶなくて、だから夏子、きのうもちこくしちゃった。」(壺井栄)

- 根津で金のいるものは事務所に駆けつける。吉原でいるものは出張所に駆けつける。後には吉原の西の宮という引手茶屋（ひきてちゃや）と、末造の出張所とは気脈を通じていて、出張所で承知していれば、金がなくても遊ばれるようになっていた。宛然（えんぜん）たる遊蕩（ゆうとう）の兵站（へいたん）が編成せられていたのである。(雁)

- 村の内でも起きて居た家は半分しか無かった。そんなに早いのに、十四五の小娘が朝草刈りをしているのだもの、おれはもう胸が一ぱいにな

った位だ。「おう誰かと思ったら、おちかどんかい、お前朝草刈をするのかい、感心なこったねい」おれがこう云って立ち止まると、「馴れないからよく刈れましね、荒場のおじいさんもたいそうお早くどこへ行きますかい」そういって莞爾（にっこり）笑うのさ。器量がえいというのではないけど、色が白くて顔がふっくりしてるのが朝明かりにほんのりしてると、ほんとに可愛い娘であった。（野菊の墓）

- 「松本さん、あのひとはええとこがあるね」染井治代が思い出して云った。さわはふふんと鼻の先きで笑って、「あのひとは市会議員の娘で金持ちだもの、何でも云えるよ。」とつぶやいた。（林芙美子）

- 時ちゃんは文学書生とけんかしていた。「何だいドテカボチャ、ひやけの茄子！もう五十銭たしや横丁へ行けるじゃないか!」酔っぱらった文学書生がキスを盗んだというので、時ちゃんが、ソーダ水でジュウジュウ口をすすぎながら呶鳴っていた。（放浪記）

この種の可能表現の文のなかでのべられている〈可能〉は、具体的な時間のなかで〈実現が可能である〉という判断や〈実現している〉という確認ではなく、主体のもとに条件がそろっているために、あるいは条件がそろえば、その〈実現の可能性がある〉ということを一般的にのべていることになる。〈ポテンシャルな可能〉の表現である。

つぎのような例では、主体にそなわっている能力のために実現の可能性もっているという〈能力可能〉をのべていることになる。

- 波子は今の年になってみると、ピアノの教師であった方が楽かとも思えるほどで、本筋のけいこをつんでいた。波子の若い、二十年前では、素人ばなれがしていた。品子もたいていの舞踏曲は弾ける。チェクッチィの練習曲は、バレエの基本を教えるためのものだから、無論やさしい。（舞姫）

- 「おれだって、ひく気になればオルガンぐらい、すぐひけるんだよ。」奥さんもすなおにうなずいた。(二十四の瞳)
- ぼくは、すっかり気が抜けてしまって、ろくに勉強もしなくなった。予習なんかしてこなくても、先生が黒板に出す問題ぐらい、簡単に解くことができる。居眠りからさめた直後でも、国語の本ぐらいすらすら読める。それで、ぼくは授業時間の大半を、ぼんやり東京のことを思い出したりしながら過ごすのだが、困ったことに、そんな状態でいるときに最も眠り薬がききやすいのだ。(ユタとふしぎな仲間たち)
- 「そのかわり、ここにこうしているようにお金の苦勞なしには行かないわよ。あなたは十五からここへ貰われて来てしまったから、私よりも世間見ずだと思うけど、実家のどん底の時代のことを考えると、私だってここを出るのが足のすくむような気にもなるのよ……私はまあ、こういう諦めのいい性分だし、身体も細い割に丈夫だから何とかして行けるけれど、あなたにはとても無理ね。いつも旦那様が須賀は毀れものみたいな身体だとおっしゃるけれど、ほんとうにこのお邸にお蚕ぐるみでいるからいいけれど、あなたは外の風に当たったらすぐ参ってしまうわよ」(女坂)
- 須賀は、月経もない中に行友の妾になって恐らくそのことが須賀の母となる機能を毀したに違いない。三十を過ぎて美貌のうつろい出した須賀が今この家を出て、芸妓になれるわけもなし、結婚してもあの病身では恐らく由美のように順当には行かないであろう。(女坂)
- おれはそれから東京に出て丁稚（でっち）奉公をふり出しに色々やったが、二十歳のときには一人前の鳶職人になっていた。そして今では、みんなの前で監督官として口が利けるようになっている。立派に生きとおして来たんだ……。(火の島)

- 少佐は、もうどうやら歩けそうなので、これまでの礼をあつくのべ、てばやく服装をととのえて、紅倫（こうりん）の家を出ました。（新美南吉）
- ペデカの案内記なしにはセエヌ河も下れなかった頃に比べると、ともかくも岸本は水からでも陸からでもビヨンクウルに行かれるまでに旅慣れてきた。（新生）
- 「ね、義兄さん、私、ダンサアになりたいんだけど、私にやれるかしら？」ふっと、何気なくゆき子が云った。（浮雲）
- 信吾はうなずいて、「千年にしても五万年にしても、蓮の実の生命は長いものだね。人間の寿命にくらべると、植物の種子は、ほとんど永遠の生命だな。」と言いながら菊子を見た。「私らも、地下に千年も二千年も埋まって、死なずに休んでいられるとね。」菊子はつぶやくように、「地のなかに埋まっているなんて。」（山の音）

これらの〈可能表現の文〉では、未来や現在の具体的な時間のなかで、その動作や活動の実現が可能であるという〈アクチュアルな可能〉をのべているのではなく、能力がそなわっていることによる一般的な時間のなかでの実現の可能性、〈ポテンシャルな可能〉をのべることになる。この〈ポテンシャルな可能〉も、先にあげた例のような何らかの条件がそろうことによる可能と、主体のもとに能力がそなわってことによる可能と、区別することができるだろう。

しかし、あとの例のような、能力がそなわっていることによる〈ポテンシャルな可能〉のばあい、その〈可能表現の文〉は、そのような能力をもつという〈人間の特性それ自体〉の表現となることもある。動作や活動のポテンシャルな可能の表現なのか属性としての能力そのものの表現なのか、かならずしもはっきりと区別できるわけではない。

- まったく彼は屁の名人だ。石太郎は、いつでも思いのままに、どんな種類の屁でもはなてるらしい。 (新美南吉)
- 「疲れたでしょう……」「ええ」「僕は半日で、十二キロ位は平気だね。森の中はいくら歩いても、案外疲れないし、夜はよく眠れるンだけどなア」 (浮雲)
- 「……義足の男に、もしお前が上陸する気があるなら、おれはこの綱を持ってあの岸へ這い上り、陸からお前を引張ってやろうっていったんです」「義足の男は泳げるんですか」所員の不審そうな顔に船長は、「義足の男はだいたいなんでもできる男でした。勿論（もちろん）泳げましたが、はやく走ることはできません・・」 (火の島)
- そこはそれ、在に生まれた女だけあって、働くことは家内も克く働く。霜を掴（つか）んで稲を刈るようなことは到底我輩には出来ないが我輩がまたそんな真似をして見給え、直に病気だところが彼女（あいつ）には堪えられる。貧苦を忍ぶという力は家内の方が反って我輩より強いね。 (破戒)
- 「ごめん、ごめん」と、ぼくは謝（あやま）った。「だって、まさかこんなところに、きみが出てくるとは思わなかったもんだからね」「おれたちは、どこにだって出られるさ」と、ゴンゾはいった。
(ユタとふしぎな仲間たち)
- 岸本はその妻の一言を聞くまでに十二年も掛った。園子は豊かな家に生れた娘のようでもなく、艱難（かんなん）にもよく耐えられ、働くことも好きで、夫を幸福にするかずかずの好い性質を有（も）っていたが、しかし激しい嫉妬（しつと）を夫に味わわせるような極く不用意なものを一緒にもって岸本の許（もと）へ嫁（かたづ）いて来た。 (新生)

- 「おまえ、どこへゆくんだ。」おじさんがたずねました。洋一がミルク買いにゆくところだと答えると、おじさんは笑いだし、「なんだ。もうよしな、よしな。こいつは一日に二升も乳を出すそうだよ。赤ん坊の二人や三人やしなえるよ。」 (壺井栄)

動作や活動の主体が一般化された可能表現の文のばあいも〈ポテンシャルな可能〉としてのべていることになるだろう。

- 小学校へ行く途中、神武天皇を祭った神社があった。その神社の裏に陸橋があって、下を列車が走っていた。「これに乗って行きゃア、東京まで、沈黙（だま）ちっちゃっても行けるんぞ」「東京から、先の方は行けんか?」「夷（えびす）の住んどるけに、女子供は行けぬ」「東京から先は海か?」 (林芙美子)
- 村の人たちはなげき悲しみ、共同で妙貞さんのおそう式をしたあと、村じゅうみんなでおまつりができるようにと、共同墓地の入口にそのお墓をつくりました。先祖のお墓まいりをする人は、わすれることなく妙貞さんへも花や水をあげられるためです。 (壺井栄)
- 「畠山の息子や娘の過程がうまく行っていると、畠山夫婦の成功ということになるかね。」「今の世で、子供の結婚生活に、親がどれほど責任が持てるんだ。」旧友に向かって言ってみたい、そんなつぶやきが、どうしたはずみか、信吾の胸に続々と浮んだ。寺の門の屋根で、雀の群がしきりに鳴いていた。 (山の音)
- 「そうよ。昔の百姓の暮らしは、苦しかったからな。とても生まれてくる子どもを全部育て上げることは出来ねえ。それで、子どもに間引きをするんだ。長男はともかく、次男、三男……よけいな子どもは、生まれたらすぐ殺しちゃう。おれなんざ、男の五番目だったからな。とても助かりつ

こねえわけよ。男は、長男以外は安全とはいえねえんだ」「間引きをされるのは、男だけなの?」「まあな。女は育ててもまず損がねえからな。美人に育てば、どんな金持ちのところへお嫁にいけることになるかわからねえし、いざとなったら売り飛ばすことだってできる。ところが、男はどうだ。大めしを食(くら)うだけで、一文(いちもん)にもならねえ」

(ユタとふしぎな仲間たち)

- ぼくたち人間の目には、池の波紋は見えるけれども、音の輪はみえない。ところが、ペドロたちの世界では音の輪もはっきり見えるのだ。見えるばかりではなく、それは十分に手応(てごた)えのある輪で、それにすばやく飛びついてつかまりさえすれば、ずいぶん遠くまでその音の輪に運んでもらえるわけである。

(ユタとふしぎな仲間たち)

- 「魚、わしゃ、何でも好きじゃんで」「魚屋はええど、魚ばア食える」男の子は、いつか、自分の家の船で釣りに連れて行ってやると云った。私は胸に血がこみあげて来るように息苦しさを感じた。

(林芙美子)

- しかし、それらの数多い生徒は、きびしい試験をして、入れるわけではない。ほかの芸ごとの弟子と同じように、バレエを習ってみたいというだけで、たやすくはいれるわけだ。その少女がバレエに適するか、行く末、舞台に立つみこみがあるかは、入門の時に、深く問うところではない。

(舞姫)

④【場所やものの特性】

さらに、時間的なありか限定がなく、時間が一般化され、そして、その動作や活動の主体も一般化された場合には、その可能表現の文は〈ポテンシャルな可能〉というよりも、〈場所のもつ特性〉や〈物にそなわる能力的な特性〉あらかずことになるのだろう。

- 三原は日航の時刻表をまた調べた。東京発十五時、福岡着十九時二十分という最終便があった。羽田まで車で飛ばせば三十分で行ける。（点と線）
- 伊豆屋というのは部落に二軒ある溪谷の温泉旅館の一つであった。「玄関からでなく、そこへ入って行ける?」「行けるさ。川の石垣を上って行く」
（あすなる物語）
- ろっかん山では、今でもよく、きつねのちらりと走りすぎるのが見られますし、村の中でだって、寒い冬の夜ふけには、むじなの声が聞けるのですから。（新美南吉）
- 丁度その部屋の前には僅かばかりの空地があつて、裏木戸から勝手口の方へ通われるように成っていた。（新生 上）
- 邸へ帰ってみて倫がまず驚いたのは、その果樹園の葡萄棚の手前に、南向きの陽当りを受けて、廻縁の三間の新座敷が芳しい檜の匂いをふりまいて建っていたことである。部屋は渡り廊下で母屋から行かれるようになっていた。（女坂）
- 何時の間にか捨吉は奥平の邸の内へ来ていた。その辺は勝手を知った彼がよく歩き廻りに来るところだ。道は平坦に成って樹木の間を何処ということなく歩かれる。（桜の実の熟する時）
- 須賀は悦子にねだられるのか手をのばして頭の上の下っている葡萄の青い一房を軽く握っている。葡萄の棚を透して来る陽の翳が須賀の白い顔に青くちらちら映っていた。「こんなに青くて食べられますの?」「とてもおいしいの、西洋種の白葡萄なの」
（女坂）
- 「汚ないが、貰って行くよ。洗濯をすればまた使える。貴重なものなんだ

からね」

(浮雲)

- ・「くわの木のねっこで、台をこしらえました。ちょうど、五つ、こしらえましたが、わりにうまくできました。お客さんがこられましても、こまりません。お客さんが五ひきでしたなら、一つずつ、みんなが、こしをかけるられる。」
(浜田広介)

- ・あのゴムボートは十人乗れる。おれのいうことが嘘だと思うなら、すつとんでいって観測所の人に聞いて来い。ゴムボートには収容能力は充分にある。
(火の島)

- ・「なんだかいい匂いがする」「そうだなあ、それに、あの葉っぱおいしそうだよ」「馬鹿いえ、木の葉っぱが食べられるものか」子供たちは、植物学者のように、食べることのできる雑草について、知識がありました。
(戦争童話集)

- ・母 ああ、これだね、まだきられるかしら。
(女の子きる)

母 すこし短いわね。むりもないね。あれから、もう四年になるんだから。
(新美南吉)

可能のかたちを述語にする〈可能表現の文〉は、未来や現在における具体的な特定の時間のなかでの、具体的な人間の具体的な動作や活動をのべるときには、〈未来のある時間においてその動作や活動が可能である〉という判断をのべたり、〈現在においてその動作や活動が実現している〉ことの確認をのべたりする。それらのいずれもが具体的なことであれば、〈アクチュアルな可能〉をのべていることになるだろう。そして、時間的なありか限定性がなくなり、時間が一般化されれば、その動作や活動は、〈可能性をもっている〉こととしてのべられる。〈ポテンシャルな可能〉の表現となる。そして、その〈ポテン

シャルな可能)から、さらに〈主体の能力的な特性〉を表現する文ともなっていく。さらに、その時間的なありか限定性のない、時間的な一般化が、動作の主体の一般化をとまなうことによって、場所や物の特性の表現ともなっていくことになるだろう。

(2)【過去形(すぎさりのかたち)】のばあい

〈可能のかたち〉を述語にする〈可能表現の文〉で過去のできごとをのべるとき、それが、具体的な個別の人間のできごとであるばあい、〈動作や活動が実現した〉ことをのべている。動作の〈可能性〉そのものをのべるのではなく、過去の時間における動作の〈実現〉をのべていることになる。

- 水田の死は戦後だから、信吾も葬式に行けた。しかし、空襲時の北本の死は、後になって聞いたほどで、谷崎英子が北本の娘の紹介状を持って会社へ来た時、北本の遺族が岐阜県に疎開したままであることを、信吾は初めて知ったのだった。(山の音)
- もし信吾が門の戸を開けに出たら、信吾は顔をしかめ、修一は酔いがさめただろう。菊子でよかった。修一は菊子の肩につかまって、うちにはいれた。修一の被害者である菊子が、修一の赦免者でもあるようなわけだ。(山の音)
- 田舎町で保子の父は盆栽道楽だった。とりわけもみじの盆栽に凝ったらしい。保子の姉は父の盆栽いじりを手伝わせられた。嵐の音の寝床で信吾は、盆栽棚のあいだに立つ、その人の姿も思い出せた。父は嫁にゆく娘に、盆栽を一つ持たせたのだろう。娘がほしがったのかもしれない。しかし娘が死ぬと、娘の実父の大事な盆栽だし、婚家で世話する者はいないし、返してよこしたのだろう。父が取りもどしたのかもしれない。(山の音)

- 「ここから、うちへお帰りかと思った。まだどこかへ、寄ってらっしゃるんですか。」「うん、夜汽車で、よく眠れたからね。」しかし、高男も、いっしょに来てもいいんだ。…… (舞姫)
- もう一人私より一日早くはいったお君さんは背の高い母性的な、気立のいい女だった。廓の出口にある此店は、案外しっとり落ちついていて、私は二人の女達ともじき仲よくなれた。 (放浪記)

このような可能のかたちによる〈可能表現の文〉をつかって、過去における〈動作の実現〉をのべるばあいも、「した」のかたちを述語にする〈現実表現の文〉をつかって、過去における動作の実現をのべるばあいも、動作が実現したということそれ自体はおなじであるだろう。しかし、〈可能表現の文〉をつかって、その〈実現〉をのべるばあいには、そこには、その動作の実現にいたる前提や背景や条件に対する、はなし手の認識のし方、とらえ方もこめられている。できごとの実現に対する〈はなし手の確認のし方〉といってもいいかもしれない。

「した」のかたちを述語にする〈現実表現の文〉が、その過去における動作の実現を、単にその存在として確認してのべているとすれば、〈可能表現の文〉の文のばあいには、その動作の実現を、実現のための条件や能力などの前提や背景のもとにとらえながら、〈ようやく実現にこぎつけた〉という、状況に対するはなし手の認識のもとで、できごとを確認して表現している文である。動作の実現ができないという可能性もあるという状況のなかで、条件がそろったことによって、あるいは能力がそなわっていたことによって、それが実現することができたという表現になる。

実際、これらの〈可能表現の文〉でのべられる動作の実現には、その実現を可能にしている条件や、実現を手だすけしてくれるできごとの存在や、その実現に対するねがいや、反対にその実現をあやぶむ懸念や不安なども、背景的な状況としてえがきだされている。実現を困難なものにしている状況のもとで

も、それをのりこえることのできる条件がそろったことによって実現にこぎつけている。

- 幸いにお時が下から上って来なかったので、お延は憚りなく当座の目的を達することが出来た。彼女は他に顔を見られずに思う存分泣けた。彼女が満足するまで自分を泣き尽くした時、涙は……。 (明暗 上)
- その車には満員の赤札が下がっていたが、停留場で二三人降りた人があったので、とにかく乗ることだけは乗られた。 (青年)
- 「京都で運よく、考古学会と美術史学会とが、つづいてあってね、両方に出られたよ。」 (舞姫)
- 「どっこいしょ」と繁が力を入れて言った。岸本はこの幼少(ちいさ)な子供の力を借りて漸(ようや)くのことで身を起した。……「や、どうも難有(ありがと)う。繁ちゃんの御蔭で漸(ようや)起きられた」 (新生 上)
- 「実際、ものを書く人間が狭い家に二人居るなんて辛い話だからね。どっちからか遠慮してるからね。運動の盛んな時分には俺が始終外に出ていたからやってゆけたんだなあ。」 (くれない)
- ただどこかおっとりしているので、相手にあまり重きを置かないところが、かえて敬太郎にらかな心持ちを与えた。それで火鉢一つを境に、顔と顔を突き合わせながら、敬太郎は別段気が詰まる思いもせずにいられた。 (彼岸過迄)
- 「お母さまのように踊りたいと、品子は思っていたのよ。いっしょに舞台へ出られた時は、うれしかったわ。もう、なん年前のことかしら……。お

母さま、また踊りましょう。」

(舞姫)

- これほどよわり、いたわられている彼女が、ふたたび教職にもどれたのは、かげに早苗の尽力があったのだ。 早苗はいま、岬の本村の母校にいた。

(二十四の瞳)

〈可能表現の文〉が、過去における動作や状態の単なる〈存在確認〉ではなく、動作や状態の〈実現〉を表現しているということについて、奥田靖雄は、つぎのように本質的に説明している。すこしながくなるがそのまま引用する。

動作・状態の実現が文法的なかたちのなかにとりこまれるのは、そのような現象が現実存在しているからにちがいないが、この実現は、ここでは、人間が動作・状態を意識的に作り出す、ということとかわわっている。この種の文においては、動作・状態にない手としてあらわれてくるのは、とくべつなばあいをのぞいて、つねに人間である。人間の動作・状態は、意識的であれば、のぞましいこととして、もくろむこととして、めざすこととして、あらかじめ頭のなかにえがきだされる。この期待し、意図する動作・状態が、実行にうつされて、リアルな存在へ移行するのだが、このような人間的な出来事が《実現》という用語でよばれるのだろう。じっさい、この用語は、／意図することが実行することで具体的なすがたのなかに存在するようになる／というような意味に、あるいは、／予定、構想、計画のなかにさしだされていることを現実の生活のなかにもちこむ／というような意味につかわれている。そして、「することができた」というかたちを述語にする文が、／実現／を表現しているとすれば、人間の動作・状態のこのような側面をきりとって、さしだしているのだろう。

おそらく、この種の文法的な意味は、／にない手が期待し、意図的につとめるにない手自身の動作・状態の実現／というふうに規定しておいて、おおきくはくるわないだろう。たんに／にない手の期待する、にな

い手自身の動作・状態の実現／をいいあらわしているばあいも、いくらかある。ここでは。みずからの動作・状態にたいする、にない手自身の積極的な態度も表現されている。

「現実・可能・必然（上）」（『ことばの科学（第1集）』
p 193・p 194）

こうして、過去のかたちにおける〈可能表現の文〉は、自分の意図したり、期待したり、もくろんだりした動作について、それを〈可能性・実現性〉というレアリゼーションの観点からとらえたうえで、〈アクチュアルに実現したもの〉として判断してのべていることになる。〈可能性〉というフィルターを通したうえで、可能性が現実性に転化したのだという判断にもとづきながら、できごとの実現をとらえて確認してのべている。

過去のかたちの〈可能表現の文〉文が、知覚や心理活動や認識や思考活動のばあいには、過去の〈動作の実現〉を確認してのべているのではなく、はなし手である自分の〈知覚や認識の実現〉をのべていることになる。

- この間三沢から受取った手紙に、少し一身上の事に就て、君に話があるからその内是非行くと書いてあったのが、この話でやっと悟れた。（行人）
- どうもおかしいおかしいと思っていたことは、この敬之進の話ですっかり読めたのである。（破戒）
- なるべく丑松を避けるという風で、顔を合すまいと勉めていることは、いよいよその素振で読めた。（破戒）
- 鳥飼は聞きながら、三原の言おうとする意味がだいたい飲みこめた。（点と線）

- 「いいえ掛けたんで御座います」「掛けても通じなかったのかい」問答を重ねているうちに、お時の病院へ行った意味が漸くお延に呑み込めるようになって来た。始め通じなかった電話は、仕舞に通じるだけは通じても用を弁ずる事が出来なかった。 (明暗)
- 新免はゆっくり立上がって、「ああ面白かった」といった。それは、いつも、こういうパーティのあとで放つ、彼の挨拶であった。多くの場合はそのことば通り面白かったが、いまの新免は決して面白いという気分ではなかった。房野八郎のなかに起りつつあることがなんであるか、新免にもおおよそ読めかけていた。房野はなにかをつかんだのだ。そのなにかが、鳥島火山噴火に関する、なにものかでなければいいかと願う気持ちが、新免の足を、石段のところへ運ばせた。 (火の島)
- 「ワダワダ、アゲロジャ、ガガイ……」座敷わらしは、そういう呪文のような言葉を、大きな声で、ゆっくりと三度繰り返したのである。もっとも、最初と二度目は、なにをいっているのかわからなかったが、三度目に、どうやらやっと聞き取れた。けれども、言葉を聞き取れたところで、ワダワダ、アゲロジャ、ガガイなんのことやら、さっぱり意味がわからない。 (ユタとふしぎな仲間たち)
- 「所長さん」州羽は所長に声をかけたが、所長はちよつと顎を引いただけだった。いいように答えて下さいとも、遠慮せずに、どうぞあなたの御意見をおっしゃって下さいとも取れた。州羽は、意見のはっきりしない所長のうなずき方を、体(てい)のいい逃げと見た。いやなことを、このおれに言わせるつもりなのかと行ってやりたかった。 (火の島)

過去における〈動作の実現〉が、はなし手の意図したり、もくろんだり、ねがったりしたものの実現、あるいは、何らかの不安や懸念をのりこえての実現、努力した上でたどりついた実現、そういうものを〈可能表現の文〉があら

わしているとすれば、現実の状況のなかでは、必ずしもその実現が五分五分の可能性をもっているとはいえないばかりもあるだろう。客観的な条件を考えれば、むしろ実現することがむずかしいときもある。そのような条件が前提となっているなかでの実現には、〈実現にこぎつけたこと〉に対する感慨や驚きや意味あいがこめられることになる。その実現の可能性のひくさというものが、客観的な条件というよりも、主観的な判断にすぎないばかりもあるだろうが、いずれにしても、はなし手はその〈可能表現の文〉のなかに、その実現に対する何らかのモーダルな意味あいをこめてのべている。

- ひとりひとりの上に思いをめぐらしながら、よくぞあのチビどもが、思いきって一本松まで来られたものだと思うと、あの日の、ほこりにまみれた足もとなど思いだされて、いとしさに、からだがふるえるほどだった。

(二十四の瞳)

- 「もう手術をなすったの」「ええ今日」「今日？それであなた能くこんな所へ来られましたね」

(明暗 上)

- しかし、あの時は、驚いたよ。何せどうも、たいへんな火勢だったからね。お前のほうは、どうだったね。べつに怪我も無い様子だが、よくあの火の中を無事で逃げて来られたね。

(お伽草紙)

- 「そんなことは覚えていないけれど、恐ろしい大浪（おおなみ）が立って、浜の石垣がみんな壊れてしまうた。」「よう、そんな時に助けに行けたね、死んだものがおったかね？」

(坪田譲治)

- 「……ぼくはほかのことでは、そう臆病でも、卑怯でもないのに、よく波子さんを、そっとだいじにして来れたと、思うんですよ。」

(舞姫)

- 「伊香保の事を考えると、お互いに、長く生きられたものね……」

(浮雲)

- 船乗り上りの年をとったコックが、煙草を吸いながら、子供をみていた。
「いいえ私の子供なのよ……」「ホー、いくつだい？よく一人で来られたね。」
(放浪記)

はなし手のがわに、その動作の実現に対する否定的な見解が前提となっている状況のもとで動作を実現させた場合には、その〈可能表現の文〉のなかには、〈可能性を現実性に転化させて実現させた〉ことに対する批判の意味あいを感情的にこめてのべることになる。

- 「俺はお前のように利口じゃないんだ。人の思惑なんか一々考えていられるか。そういうお前がだな、よくも正月のような時に家を空けられたよ。」
(くれない)
- 言ううちに次第に怒りが広介にこみあげて来た。「なんだと、よくも言ったな。小説なんか書かせて悪かったね。やめろ、やめろ。傲慢な。よくもそんなこと俺にむかって言えたよ。……」
(くれない)
- 「……あんな陰気くさい浄土宗など、どこがいいのです。よくもこの代々の法華宗の家へ、娘がほしいなんて申し込めたものだ。……」
(太宰治)
- 「自分の家とはよう云えたもんじゃ、お父つあんもお母さんもとうの昔に仏様だしな、お前はわしを助けもせんで早うからおらんようになっつて、俺の家とはよう云えたもんぞな、何云いいなさるかの、義兄(にい)さんに聞えてみなさい、怒られるぞ」
(林芙美子)
- 「田舎へも、いい恥をさらしましたね。私たちも田舎と縁が切れたように

帰らないし、房子は頼る人もないのに、よく行けたものですよ。」「田舎で
どこの世話になっているんだろうね。」 (山の音)

このように、過去のかたちでの〈可能表現の文〉が、具体的な時間としての〈過去における動作の実現〉をのべているとすれば、その可能の実現は、〈アクチュアルな実現〉としてのべることになる。しかし、過去のかたちでの〈可能表現の文〉であっても、時間的なありか限定がされないばあいには、動作の実現ではなく、〈ポテンシャルな可能〉あるいは、主体の〈能力・特性〉をのべることになる。

- 明子は机の前で疲れるとベッドへ来て寝た。横になればすぐ眠れた。何
度でも寝た。その度に眠った。妙な彼女の遅しさでもあった。

(くれない)

- おう、そうそう。お玉は三味線がひけたっけ。 (雁)

- 赤んぼは廊下に寝かされると、裸の足をあげて、その足の指を両手につ
かんで手よりも足の方を自由に動かさせた。 (山の音)

さらに、動作の主体も一般化され、時間のありか限定がなくなると、場所
や物の特性をのべることになる。

- 静かであった。小屋は一尺しか床上げがしてなく、前後は開け放され
て、裏まで見通せた。 (野火)

- 朝起きると、千代は一ばんに井戸端へ顔を洗いにゆきます。井戸は恵比
須さんとの境にありました。そこからあまり広くない境内は一目に見渡せ
ました。 (壺井栄)

- もと植木屋でもあったらしいその庭先には木戸の用心も竹垣の仕切もな

いので、同じ地面の中に近頃建て増された新しい貸家の勝手口を廻ると、縁鼻まで歩いて行けた。 (明暗 上)

• 少し遠廻りして、学校の横手の雑木山の中腹に上って行った。そしてそこにある学校の開墾地のある斜面へ出て、草の上に腰を降ろした。そこから
は部落が一望のもとに見降ろせた。 (あすなる物語)

• 電車を二つばかり手前の停留所で下りて、下りた処から、すぐ右へ切れさ
えすれば、つい四五町の道を歩くだけで、すぐ門前へ出られた。 (明暗 下)

• 電燈で照らされた廊下は明るかった。何方(どっち)の方角でも行こうと
すれば勝手に行かれた。 (明暗 下)

【2】否定のかたちにおける可能表現の文

肯定形における〈可能表現の文〉が、動作やできごとの実現をレアリゼーションの観点にすえたうえで、それがアクチュアルなものとして実現すること、あるいは、ポテンシャルなものとして実現の可能性をもつこと、あるいは、能力をもっていることをのべているとすれば、否定形における〈可能表現の文〉は、その実現の可能性を否定することになる。すなわち、人間の意図したり期待したり予定したりする動作やできごとが、その実現の可能性の観点からみて、具体的にアクチュアルなこととして実現しないような状況であるということのをべる。あるいは、ポテンシャルなこととして実現の可能性をもっていないこと、あるいは、能力をもっていないことをのべる。そして、その〈実現の可能性の否定〉というのは、実現のための条件が欠けているために実現できないばあいと、能力そのものが欠けているために実現できないばあいとがあるだろうし、また、実現のための条件も、外的な条件と内的な条件とがあるだろう。さらには、現実の世界のできごとにおいては、条件の欠如と能力の欠如

とは、そうかんたんに切りはなすことができないだろうし、実際の可能表現の文においてはその両方がまじりあっているばあいも多いだろう。しかし、〈可能表現の文〉というものが、人間の動作や現実のできごとを、その〈実現の可能性〉の観点にすえてとらえながら、確認してのべているとすれば、条件の欠如による不可能と能力の欠如による不可能との、このふたつを区別しながらとらえていくことも必要なことだろう。

いずれにしても、〈可能表現の文〉の研究においては、肯定文のばあいであっても否定文のばあいであっても、〈ものがたり文〉というわくのなかで、はなし手が現実の世界のできごとをどのようにとらえ、どのようなものとしてのべているかを、ひとつひとつ確認し、記述していくことが研究の出発としての必要な作業となる。

(1) 【現在・未来形（すぎさらずのかたち・非過去形）のばあい

① 【未来のことがら】

否定形の〈可能のかたち〉が未来のことがらについてのべているばあいには、その未来の動作や活動が、具体的な時間のなかでのできごとであれば、それはアクチュアルなこととしての未来における〈実現性〉についてのべている。もちろん、〈可能のかたち〉という文法的なかたちであるから、〈可能性〉をとおしていることはたしかであるが、ポテンシャルな〈可能性〉それ自体をのべているのではなく、未来の動作や活動やできごとに対しての〈非実現〉という判断や見解をのべることになる。

- その足がずぶずぶと入る勢いに乗って、後に残した足を抜き、同じように前へ出す。私は疲れて来た。もし前方の泥がこれ以上深ければ、完全に動けなくなる。 (野火)
- 走りだしましたが、胸はどきどきしていました。よくは分からないけれ

ど、三千円ほどは入っているらしい封筒の金は、交番へとどけない中に五百円減ってしまったのです。ああもうとどけられない。届けて落し主がわかったら、自分の悪事がばれるのだ。(壺井栄)

- 「……近頃悪い人買がこの辺を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお答(とがめ)があります。あたり七軒巻添になるそうです」「それは困りますね。子供衆もお出(いで)なさるし、もうそう遠くまでは行かれませんか。」(森鷗外)
- ……登らなければ、登りつづけなければ、決して坂の上へは出られないのだ……。倫はほっと深い息をして重い傘を持ちかえた。(女坂)
- さっきしらべたとき、歯のあとが二カ所ほど傷になっていましたが、それをお巡りさんに見せると、鑑札のないことがばれて、叱られそうな気がして、つれてこられないのです。(壺井栄)
- 「どうして、泣くの。ほら、そのなみだで、ぼく、ながされてしまうじゃないか。おうちへかえれなくなるよ。(浜田広介)
- 「北の島からきました、ふぶきのために汽車がおくれて、いま、ていしゃばにおりました。しかし、これから町までは、いかれそうもありません。なにしろ、道がありません。」(浜田広介)
- 「当分会えないのね、時ちゃんとは……私、もう一本呑みたい。」時ちゃんはうれしそうに手を鳴らして女中を呼んだ。(放浪記)
- それからおじいさんは内(うち)に帰りたいと思っても、恐くて帰れない。どうしようかどうしようかと思っているうちに遠くで声がして来た。(赤い鳥)

このように、人間の動作や活動が未来のこと（すぐこれからの動作・近未来の動作もふくめて）であっても、それが具体的な人間の具体的な時間のなかでのできごとであるばあいには、否定形の〈可能のかたち〉は、アクチュアルなこととしての未来の動作に対する〈非実現〉という判断や予想や見解をのべている。〈実現の可能性〉という観点を通しながら、〈非実現〉であることとしてのべている。これらの例において、その実現をさまたげているものは、外的な状況であったり、内的なものであったりするが、いずれにしても、アクチュアルなこととして、〈その状況のもとでは実現きない〉という判断をのべることになる。

しかし、つぎのような例では、その動作の実現の可能性を否定するのは、自分自身の〈意志〉である。動作を実行するために必要となる何らかの条件を主体のがわから設定して、その条件にてらしあわせて〈実現が不可能〉であると判断してのべる。このばあい、その条件が客観的に理にかなっているかどうかにかかわりなく、まったくの主体の主観的な論理であってもかまわない。単なる判断や見解ではなく、動作の〈非実現〉への意志をのべる。

- 「泊ってかないの？私、お金あるわよ」「今日は泊れないね」「そう、つまらない。どうして？この間、叱られたンですか？」「子供じゃあるまいし、誰も叱りゃアしないよ。今日は駄目だ……」
(浮雲)
- 「そうですか？もう、榛名山（はるなさん）へ登って、湖水へ飛び込むのはおやめ？」「うん、君とは死ねない。もっと、美人でなくちゃ駄目だ……」「まア、憎らしい。いい事よ」
(浮雲)
- 「だって顔を洗わなくちゃ。」「いいじゃないか。さっさと洗え。」「だって見ていらっしやっちゃ、洗えませぬわ。」「むずかしいなあ。これでいいか。」末造は烟（けぶり）を吹きつつ縁側に背中を向けた。
(雁)

- 「そうでしょうけれど、あの土地には、私と品子の舞踊の夢が、こもっているんですもの。私の幼い時、品子の幼い時からの、踊りの精が、あすこにいますの。あすこには、いろんな踊りの幻がいつも私に見えていますの。あの土地を、人手に渡せないわ。」 (舞姫)
- 彦市ははあ、隠れ蓑。そらまた珍らしかもんば着とンなはるな。うん、そらア貸してンよかばってん、姿ば見せんなら貸されんたい。」 (木下順二)
- 「兄さんがそういう気で居らっしゃる以上、お父さんばかりじゃないわ、あたしだって上げられないわ」 (明暗 上)
- 然し下女が襖越(ふすまごし)に手を突いて、風呂の沸いた事を知らせに来た時、彼は急に思い付いたように立ち上った。「まだ湯なんかに入っちゃいられない。少し庭に用が残ってるから。お前達先へ入るなら入るがいい」 (明暗 上)

②【現在のことがら】

肯定形の現在の〈可能のかたち〉が、動作やできごとが、いま現在アクチュアルなこととして〈実現している〉ことを確認してのべているとすれば、否定形の現在の〈可能のかたち〉の方では、人間の意図する、ねがう動作がいま現在実現にこぎつけていないことを、すなわち〈アクチュアルな非実現〉を確認してのべることになる。すなわち、現在における〈動作の非実現〉の確認をのべることになる。また、ことがらが具体的な時間としての未来のことであるばあい、未来における動作の実現が〈アクチュアルに非実現である〉という判断や見解をのべるのに対して、現在のことがらのばあいの方では、いま現在アクチュアルなこととして〈実現していない〉という確認をのべている。

そして、否定形の現在の〈可能のかたち〉によつてのべられる〈アクチュ

アルな非実現) もまた、実現のための条件が欠けているばあいと、能力そのものが欠けているばあいとがある。また、その実現のための条件も、外的な条件のばあいと内的な条件のばあいとがある。現実の世界のできごとにおいては、条件の欠如と能力の欠如とはそうかんたんに切りはなすことができず、実際の可能表現の文においては、その両方がまじりあっているばあいも多いだろうが、このふたつを区別しながらとらえていくことも必要であるだろう。

【外的なことから・条件】

- いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろ、ぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれっくなくなつて、頭をびくの中につこんで、うなぎの頭を口にくわえました。

(新美南吉)

- わたくしは古雑誌と古着とを一つに包み直して見たが、風呂敷がすこし小さいばかりか、堅い物と柔いものとはどうも一緒にはうまく包めない。

(溷東綺譚)

- 「待ってくれよ」と、ぼくはいった。「足もとが暗くて、歩けやしない」

(ユタとふしぎな仲間たち)

- 「バロンポンはこつとですか」と彼は喘(あえ)ぎながらいった。「こつちには違いないが、米軍がいて通れやしねえぜ」彼はへたへたとそこへ坐つた。

(野火)

- 化石は、家のなかにあるのではなくて、谷間の崖の斜面とか、谷川の上流の沢とかを捜さなければみつからないのだ。そうでなくても危険な谷間を、女の足でしかもこんな雨降りつづきでは、とても歩けやしない。

(ユタとふしぎな仲間たち)

- 最初、久助君は、宝蔵倉（ほうぞうぐら）の前にいって見た、多分の期待をもって。そこで、よくみんなはキャッチボールをするから。しかしきてみると、だれもない。そのはずだ、豆が庭いっぱいほしてある。これじゃ、なにもして遊べない。（新美南吉）
- 「なんとかならないでしょうか洲羽さん、所員はこの三日間というものほとんどなにも食べていません。寝てもいないのですよ」賄（まかない）係がいった。「なんとかしろといったって、ぼくので地震はおさえられない」洲羽は、お門違いのことをいうなといった顔で、賄係をたしなめた。（火の島）
- 寝飽きると小抽斗から健脳丸の瓶を出して来て、十五六粒前歯でぷりぷりくんでいる。部屋の中は落葉やくもの巣だらけで眼も口もあけてられない。（林芙美子）
- 頭上を仰ぐと、はるか高いところで豆粒（まめつぶ）ぐらいのダイヤモンドのようなものが白くちかちかと輝いていて、まぶしくてとても目を開けてられない。（ユタとふしぎな仲間たち）
- …… 弁天へ降りる石段の上まで来て、又立ち留まった。ベンチの明いているのが一つあるので、それに腰を掛けて、ラシイヌを翻して見たが、もう大ぶ昏（くら）くて読めない。（青年）
- …… お末は尚々（なおなお）身を慄わせて泣いた。頭から肩、肩から胴まで、泣きじゃくる度に震え動いて、言うことも能（よ）くは聞取れない。（破戒）

これらの例において、動作の実現をさまたげている〈外的なことがら・条件〉となっているのは、「具体的な生物の状態・ものの形状・まわりの自然の

状態・周囲の状況・天候状態・他の人間の行動やことがら」などの外的な条件であり、そして、実現がさまたげられている動作やできごとは、「具体的な動作・活動・知覚活動・認識」などであるが、「言語活動・生理的な活動や心理的な活動・社会的な活動・態度」なども、こういった例のなかにはいる。

(寝つかれない・話せない・答えられない・落ちつけない・～する気になれない・結論をつけられない) など。

【内的なことがら・条件】

自分自身の内的なことがらが動作や活動の実現をさまたげているばあいもある。

- 「どうなさいましたの？」上着を着せかける用意をして、信吾のななめうしろに立っていた菊子は、前にまわった。「ネクタイが結べない。結び方を忘れちゃった。おかしいね。」 (山の音)
- …… 牡牛が一匹の熊を相手に、じっと睨（にら）み合いをしているじゃありませんか。彼は驚いて逃げようとしてました。が、足が竦（すく）んで走れません。 (赤い鳥)
- 無心に踊っていた品子は、ふと気にかかって、体がかたくなり、動きもぎこちなくなつた。こだわりがあると、体を男にまかせたようには、踊れない。 (舞姫)
- 行一が声を張り上げるので、徹子もいつまでもつづけている。行一は母の出て来ない窓に向って執着し、立ち去れないでいる。 (くれない)
- 「繁ちゃん、父さんは独りじゃ起きられない。お前も一つ手伝っておくれ。父さんの頭を持上げて見ておくれ」と岸本に云われて、繁は喜びなが

ら両手を父の頭の下に差入れた。 (新生)

- 「一寸起きていますか？」もう十時頃だろうか、隣のシンガーミシンさんが帰って来たらしい。「ええまだねむれないでいます。」「一寸！大変よ！」「どうしたんです？」 (放浪記)
- 電気の消えたせまい部屋の中で、私はまるでお伽話のような蛙の声を聞いた。東京の生活の事、お母さんの事、これからさきの事、なかなか眠れない。 (放浪記)
- 樋をつたう雨声が滝のように激しくなり、ゆき子はふっとまた現実に呼び戻される。くさくさして、仲々寝つかれない。 (浮雲)
- 「こうして髭を生やしたり、洋服を着たり、シガーを銜（くわ）えたりするところを上部（うわべ）から見ると、如何（いか）にも一人前の紳士らしいが、実際僕の心は宿なしの乞食（こじき）みたように朝から晩までうろろしている。二六時中不安に追い懸けられている。情ない程落付けない。 (行人)
- ゆき子は、信者の合唱を聴きながら、板敷に坐った。じいっと、合掌して、眼を閉じてみたが、もどかしい気持ちが糸のようにもつれ、少しも落ちついた気分にはなれない。眼の前に、手ごたえのある札束がちらついて仕方がない。 (浮雲)
- 富岡は、自分のずるさを考えている。清吉はそそのかされて殺人を犯したようなものだった。ナイフの刃を、富岡は手首の動脈にあててみたが、ひと思いにそこへ突き差す気にはなれない。 (浮雲)
- 「飲みに行こうか。そのくらいの金はある！」と言った。「そんな気にはな

れませんよ。年の瀬の失業者ですからね」それがせい一杯の反抗のように、男はじゃあと短い言葉を残すと、三田村から離れて行った。(黒い蝶)

- 「そう遠慮しないでも可いから、是非話して下さい」「遠慮じゃないのよ、話せないから話せないのよ」「然し自分の胸にある事じゃありませんか。話そうと思えば、誰にでも話せる筈だと思いますがね」

(明暗 下)

- 「面倒だな、僕は今日は頭が悪くて、そんな事は遣(や)ってられないよ。好(い)い加減に訳して置けば構わないじゃないか。どうせ原稿料は頁でくれるんだろう」

(それから)

これらの例においては、自分のめざす動作や活動の実現をさまたげているのは、自分の何らかの内的なことがらである。それは、自分の生理的な状態や心理的な状態・自分の仕事やおかれている状況・つごう・用事などである。そして、自分の内的なことがらによって、その実現をさまたげられているものも、自分の具体的な動作や活動のほかに、社会的な活動・生理的な活動や心理的な活動、言語活動や知覚活動、思考活動や認識活動、ものごとの理解やものごとに対する態度であったりする。

このような例には、「動けない・立っておれない・歩かれない・休んでいられない・一日もあけられない・待ってられない・食べられない・こうしてはいられない・うろついちやいられない・寝てはいられない・ゆっくりしてはいられない・お目にかかれない・孤独ではいられない・まごまごしてはいられない・負けてはいられない・愚図々々してはいられない・やめられない・よわみをみせてはいられない・だまっていられない・じっとしてはいられない・居ても立ってもいられない・耐えられない・思い切れない・泣き切れない・笑えない・言い出せない・切り出せない・書けない・読めない」などがある。

しかし、つぎのような例になると、何らかの内的なことがらや内的な条件によってべつの心理活動の実現がさまたげられるということではなく、ある対象への認識や理解や判断、思考や心理や態度それ自体の非実現をのべている。

- ところが、じれったいことに、ぼくはゆうべのペドロの呪文を、どうしても思い出すことができなかった。ワダワダという言葉ではじまることはわかっているが、そのあとがどうしても思いだせない。

(ユタとふしぎな仲間たち)

- 「その三十円をどうして、おれが出すのかエ。おれだけがその水を飲むなら話はわかるが、ほかのもんもみんな飲む井戸に、どうしておれが金を出すのか、そこが、おれにはよくのみこめんがのオ」と、やがて利助さんはいいました。

(新美南吉)

- 「お母さまもう癒らないんですって……お医者さまも皆もそういうけど、私は信じられないのよ。大兄さまはほんとうのお母様の顔知らないんですよ」

(女坂)

- 「仏界は入るに易く、魔界は、入るに難し。」と、もう一度つぶやいてみた。この言葉が、父の心と、なにかつながりがあるのだろうか。言葉そのものの意味も、品子には、いろいろに思えて、たしかにはとらえられない。

(舞姫)

- 広い畑と畑との間を、真直（まっすぐ）に長く通っている街道である。左右には溝があって、その縁には榛（はん）の木のひよろひよろしたのが列をなしている。女の「あれ、あそこに」という方角を見たが、灰色の空の下に別に灰色の一線が劃（かく）されているようなだけで、それが水だとはっきりは見分けられない。その癖純一の胸には劇（はげ）しい恐怖が湧く。

(青年)

「忘れられない・答えられない・くみとれない・判じられない・受け取れない・思い浮かべられない」など

このように、否定形の現在の〈可能のかたち〉は、具体的な動作や活動・知覚活動や認識活動・生理的な状態や心理状態・理解や判断や態度の実現が、人間の意図や期待や努力があっても、何らかの外的なことがらや内的なものさまたげのために、それが〈いま実現していない〉ということをのべている。

文法的なかたちとしてみれば、〈可能のかたち〉の否定形の現在というのは、現在における〈可能性の否定〉すなわち〈不可能性〉をのべるかたちということになるのだろうが、実際には、この種の文は、具体的な時間としての現在における動作やできごとを、その〈レアリゼーション・実現性〉の観点にすえたうえで、アクチュアルなものとして実現にこぎつけていないこと、〈アクチュアルな非実現〉を事実としてのべることになる。現在形の〈する〉のかたちの否定形〈しない〉を述語とする文が、現実表現の文として、動作の非実行を事実としてそのままのべるとすれば、可能の否定形を述語とする文は、動作の実現へのねがいや期待やもくろみ、あるいは、何らかの実現へのこころみや努力があるにもかかわらず、何らかの外的な条件や内的な条件のために、いま現在、実現にこぎつけることができないという、レアリゼーションの観点にてらしたうえで〈アクチュアルな非実現〉をのべている。

しかし、現在のことであっても、具体的な時間のありか限定がうすれて、ある程度一般化された時間のことであれば、〈アクチュアルな非実現〉に〈ポテンシャルなこととしての不可能性〉の意味あいがふくまれて、ふたつの側面がまじりあつてのべられていることになるだろう。

- 私は茶のみ茶碗いっぱいのお飯が食べられない。昨夜は煙るような雨に濡れて海岸の棧橋を渡りました。(くれない)
- 「貴女はまだ一人なの？」袴をはいて靴を鳴らしている彼女は、気軽そうに口笛を吹いて私にたずねた。「私二十八なのよ。三十五円くらいじゃ食

えないわね。」

(放浪記)

- 日暮里（につぼり）の金杉から来ているお千代さんは、お父つあんが寄席の三味線ひきで、妹弟六人の裏家住いだそうだ。「私とお父つあんとで働かなきゃあ、食えないんですもの……」お千代さんは蒼白い顔をかしげて、侘びしように赤い絵具をペタペタ蝶に塗っている。(放浪記)
- 「でも、やっぱり東京へ行きたいわ。とても、あのひと、うるさくて、私、仲々東京へ出られないンです……」ざあっと湯を背中へ流して、おせいはまた湯のなかへ、音をたてては行って行った。(浮雲)
- 「そんなことをいうもんじゃありません。奥さまは旦那さまより余程芯の強い方ですからね…… ああ見えて旦那すまも一目置いていらっしゃるんです。あなたも奥さまに憎まれるとこのお邸にはいられませんよ」「莫迦にしてる……」紺野はむっとした顔で掃き終わった箒木をぼんと投げ出した。(女坂)
- お天陽様相手に商売をしているお父さん達の事を考えると、この三十円ばかりの月給も、おろそかにはつかえない。途中一升一円の米を二升買った。(放浪記)
- 里子は幼くて、仲間に入れてもらえぬらしい。信吾が歩き出すと、「おじいちゃま。」と追いつがって来た。(山の音)
- 「小夜坊（さよぼう）に、悪いことしちゃったんだ。小夜坊は、祭りになっても親からなにも買ってもらえねえ。いい着物も着せてもらえねえ。親たちは祝い酒を飲んでいるのに、小夜坊は相変わらず弟の子守だ。おれは可哀そうになって……(ユタとふしぎな仲間たち)

- 「到頭やって来たよ」彼は言って、「どうや」と笑った。何がどうやだか、いっこうに解らなかった。「夫人は?」「来た。彼女が来んと俺は来れんからね」 (黒い蝶)
- 「いやよ。わたし、一緒になんか暮してられない。早く別になってしまった方がいいの。どうせ、あなたは毎日女に逢いにゆくのだろうし、一緒にいられるものではないわ。」 (くれない)
- 「運動するといいましても、何分、この年寄りひとりではどこへも出られません。」と、おじいさんは、かしくまって坐り、膝(ひざ)の上で、しなびた手をこすっていました。(小川未明)

このような例のばあい、現在のことがらをのべていながらも、具体的な時間のなかでの〈アクチュアルな非実現〉だけをのべているのではなく、何らかの外的な条件や内的な状況のために〈動作や活動などできない状況にある〉という意味あいをもった〈ポテンシャルな不可能性〉ものべられていることにもなるのだろう。

「一緒にいられない・離れられない・可愛がれない・やきもちもやけない・あそんじゃいられない・言われない・答えられない・買えない・生きてはいられない・おとなしくしてはいられない・まかせておかれぬ・常道を踏んではおられない・落ちつけない・～する気持ちになれない・安閑としちゃいられない・構っちゃいられない・負けてはいられない・こだわってはいられない・落ちついていられない・見ていられない・耐えられない・痛快がられない・つかめない・口に出せない・刃向かえない・おっしやれない・興味を有せない」など、心理活動や言語活動や態度的なものがおおく、動作のばあいでも具体的なひとつの動作というよりも活動一般をあらわしているともいえるだろう。

③【時間的なありか限定がないばあい】

否定形の現在の〈可能のかたち〉は、それが、具体的な時間のなかでのできごとであれば、基本的には、現在や未来における動作やできごとについて、アクチュアルな（非実現）をのべることになるのだが、具体的な時間のありか限定がされていないばあいには、〈ポテンシャルな不可能性〉をのべることになる。

- 「どうだな。私の弟子になった所が、とても仙人にはなれはすまい。」片目眇（かためすがめ）の老人は、微笑を含みながら言いました。「なれません。なれませんが、しかし私はなれなかったことも、反（かえ）って嬉しい気がするのです。」（赤い鳥）
- 「うん、ちょうにしてよ。すぐしてよ。ぼく、ちょうだいすきなんだ。」こんどは善太のほうでこまってしまいました。そこでいいました。「だって、ちょうんなったら、もう人間になれないんだぞ。」「いや、空が飛べるからいいや。」（坪田譲治）
- 「こんな安い鉄砲じゃ雀なんか取れないだろう」「そりやお前が下手だからさ。下手ならいくら鉄砲が好くたって取れないさ」（明暗 上）
- 「まあ?」「おじゅろのなかで、仏さまのお姿を、真似したら、物体（もったい）ないことでございます。そんな心がけでは、〈仏の手〉は踊れません。」「まあ」友子は夢からさめたように、湯船を出た。（舞姫）
- 「…… 岬勤めはもうよいでしょう。本校へもどってもらうことにしたんじゃがな、その足じゃあ、本校へもまだ出られんでしょうな。」（二十四の瞳）

- 「随分遠いところへ来たわね。ここから、また船に乗って、一晩かかるなんて、一人じゃア、私、とても来られないわ」
(浮雲)
- 「でも、みんな 753 で、かいてあったわよ。」「バカだな、あれは子供のお祝いの七五三のことだよ。三りん車は千円の上もするんだよ。」「ほんと？じゃあ、なお買えないわ。」
(壺井栄)
- 「ふん。一体自動車というものは幾ら位するだろう」「五六千円から、少し好いのは一万円以上だというじゃあないか」「それじゃあ、僕なんぞは一生画をかいても、自動車は買えそうもない」
(青年)
- イビツな男とニンシキフソクの女では、一生たったとて白い御飯が食べそうにもありません。
(放浪記)
- ……お百しょうはきいていました。そして、「高いなあ、とてもおれには買われねえ。」と、かれは、頭をかしげていたりしました。
(小川未明)
- 「そうね。やっぱりひとりではいられまいな。」「ね、そうでしょう。わたしもそう思うわ。あなたは、独りでいられる性の人じゃないわ。ねえ」
(くれない)

④【規範的な不可能】

- それから、もう諦めた、というような、それでも尚（なお）お威（ど）すような調子で言った。「二重結婚は、法律的にも出来ないのよ。あなたには法律的には私の夫なのよ。結婚の通知なんか出せないのよ。」
(くれない)

⑤【人間の能力・特性】

- ・「ごめん下さい。」と、勝手口からおとずれて、ほどのよい笑顔で、ほんの少しでも人より高く買い、あっさりと商売をしてゆけば、大ていお得意はとれる、というのが道子のお父さんの教えた屑屋のひけつでした。しかし、まだ若い堂本さんには、そんなほどのよい笑顔などはなかなか作れません。(壺井栄)

- ・(三男) 井戸車のある家と、めくらのじいさんのお家の間をとおっていくとね、杉の垣根にあながあいてるからね、そこをくぐると、お医者さんちの裏だよ。垣根をくぐったときにね、頭に気をつけないと、物置からぶらさがっている樋(とい)にぶつかるよ。

(母) あきれた子だね。そんなとこをくぐって遊んだのかい。おかあさんは、そんなところはとおれませんか。(新美南吉)

- ・「そう。波子さんといると、僕にも聞えて来るようですね。スプリング・ソナタなどを、二人で弾いた楽器は、二つとも焼けてしまった。しかし、バイオリンが助かっている、ぼくはもういじくれないな。」(舞姫)

……それを添えただけでは、物足りない。ちょっと一筆書いてやりたい。さあ困った。学校は尋常科が済むと下がってしまって、それからは手習いをする暇もなかったの、自分には満足な手紙は書けない。(雁)

- ・「僕は芸術家がる訳ではないのですが、どうも勝負事には熱心になられませんかね」(青年)

- ・「おお、よく来たな。お目出度う、国子はいくつになったのかな、あはゝゝ、孫も多くなると一々年を覚えられん」(女坂)

- 「……貴方が何故行きたがらないか、私にはちゃんと分ってるんです。貴方は臆病なんです。清子さんの前へ出られないんです」 (明暗 下)

⑥【ものや場所の特性】

時間的なありか限定がなく一般化されるばかりでなく、その動作の主体も一般化されることになれば、物や場所やことからのもつ特性をのべることになる。

- (三男) あそこからいくと、とても早いや。
(長女) あそこはもうとおれないのよ。井戸車のお家とめくらのじいさんちの間に、からたちの垣根を結んじまったから。よし坊ちゃんはまだ長い間見ないから、知らないんだわ。 (新美南吉)
- バスに乗る人はきまっている。毎日、荷を負って、町へ出たり入ったりするものが、そんなものに乗れっこない。それに雪が降れば、車など、通りたくても、通れっこない。ここは、冬の方が休む人が多いんだから…… (小川未明)
- ……せっかくの不忍(しのばず)の池に向いた座敷の外は籠塀(かごべい)で囲んである。塀と家との間には、帯のように狭く長い地面があるきりなので、もとより庭というほどの物は作られない。末造のすわっている所からは、二三本寄せて植えた梧桐(あおぎり)の、油雑巾(あぶらぞうきん)でふいたような幹が見えている。それから春日燈籠(かすがどうろう)が一つ見える。 (雁)
- 隣で汲んでいる女子(おなご)が、手早く杓を拾って戻した。そしてこう云った。「汐はそれでは汲まれません。……」 (森鷗外)
- だが、この快適な船は、屋久島までの航路で、それ以上は今度の戦争で

境界をきめられてしまっているのだ。この船は、屋久島から向うへは、一歩も出て行けない。南国の、あの黄ろい海へ向って、この船は航路を持つてはいないのだ。(浮雲)

- もはや涙すら涸(かわ)いてしまうような世界だ。一切の感傷はゆるされない。自分の盟友のうちにも敵となる可能性はある。(蒼き狼)

(2) 【過去形(すぎさりのかたち)】のばあい

否定形の過去の〈可能のかたち〉を述語にする文では、動作やできごとが、人間の意図や期待や努力にもかかわらず、何らかの外的なことがらや内的なものがさまたげとなって、あるいは能力が欠けているために実現しなかったこと、すなわち、〈非実現〉をのべている。この過去形による〈可能の否定のかたち〉を述語にする文は、具体的な時間としての過去のばあいには、動作の〈ポテンシャルな不可能〉をのべるのではなく、動作の〈アクチュアルな非実現〉をのべることになる。すなわち、できごとをレアリゼーションの観点からとらえたうえで、具体的な過去の時間において、その動作が実現にこぎつかなかったことをのべている。未来のできごとのばあいには、その非実現は〈はなし手の判断〉としてのべられ、現在のできごとのばあいには、その非実現は〈はなし手の確認〉としてのべられるのだが、過去形のばあいにも、そのできごとの非実現は〈はなし手の確認〉としてのべられている。

① 【具体的な過去の時間のことがら】

【外的なことがら・条件】によるばあい

- 三田村とて一日も早くこらでムラビヨフの会を形だけでも開いておきたかったが、会社からどうしても体が抜けなかった。(黒い蝶)

- 夜更けてずっと冷えて来たせいか、一枚の蒲団だけでは寒くて寝つかれ
なかった。泥のように疲れているながら、露営をしているような落ちつきの
なさである。 (浮雲)
- 料理人の人が「おはよう！」と声をかけてくれたので、私は昨夜蚊にせめ
られて寝られなかった事を話した。 (放浪記)
- ほんとに、風邪けだったのかしら？早苗のほかにも、十幾人かの子ども
がそれぞれの理由で旅行にこられなかったのだが、とくべつに早苗が気に
なるのは、岬の生徒で、彼女ひとりが不参加だからかもしれぬ。
(二十四の瞳)
- 風が彼のことばをとばした。台風は鳥島には来ないで北東にそれたが風
はまだ強く、そこに長いこと立ってはいられなかった。 (火の島)
- 「遅くなりました。兄が胃癒攣(いけいれん)起して家を出られませんでしたの」
(黒い蝶)
- あてもなく歩いている中にあたりは、だんだん暗くなってきて、たまに
行きあう人の顔も見わけられなくなりました。いつか、純は小さな流れの
石橋の上に立ちどまっていました。 (壺井栄)
- 自分はお松はなつかしいけれど、まだ知らなかったお松の母が居るから
直ぐにお松に甘えられなかった。母はお松の母と話をしてる。 (野菊の墓)

これらの例において、動作の実現をさまざまげる〈外的なことがら・条件〉
となっているのは、「まわりの自然現象・さむさ・暗さ・家庭の事情・まわり
の生物・他の人間のことがら」などの外的な条件であり、そして、実現がさま
たげられた動作やできごととは、「具体的な動作・活動・知覚活動・認識・言

語活動・生理的な活動や心理的な活動・社会的な活動・態度」などである。
(来られなかった・立っていられなかった・出られなかった・出せなかった・
行けなかった・逃げられなかった・買えなかった・描けなかった・会えなかつ
た・近づけなかった・寝つかれなかった・寝られなかった・眠れなかった・見
わけられなかった・聞きとれなかった・話せなかった・口がきけなかった・泣
けなかった・甘えられなかった・怒れなかった・いばっていられなかった・澄
ましていられなかった・落ちついていられなかった・じっとしていられなかつ
た・負けていられなかった・耐えられなかった・覚えられなかった・暮らして
いられなかった・望めなかった・あとへ引けなかった・許されなかった) な
ど。

【内的なことがら・条件】によるばあい

- もっと、もっと、まだ、まだ！雪枝の声が絶えず耳許で聞えていたが、
鮎太は起き上がれなかった。しかし、気絶はしていなかった。波の音も聞
えだし、高い空に幾つかの星も見えた。 (あすなる物語)
- この母は年に一二度ずつは上京して、子供の家に五六日寝起す例にな
っていたんだが、その時は帰る前日から熱が出だして、全く動けなくなっ
た。 (それから)
- 十月の朝、信吾はネクタイをしめようとして、ふっととまどう手つき
で、「ええと？ええとと……？」そして手を休めると、困った顔をした。「は
てな？」結びかけたのをいったんほどいて、また結ぼうとしたが結べなかつ
た。ネクタイの両端を引っばって、胸の前へ持ち上げると、それをなが
めながら子首をかしげた。 (山の音)
- そんなにいっていたのに、いよいよくる日になると、健介はかぜをひい
て外へ出られなくなりました。てい農場へは純とシズがゆくことになり、

お母さんと健介はるすばんです。

(壺井栄)

- 「みんなでおむかえにくるっていったの。そしたら健ちゃんが、急にねつを出して、こられなくなったの。お母さんはかんびようしてるし。」

(壺井栄)

- 悦子たちの帰った晩から倫は寒気がすると言って床についたが、翌朝はもう起きられなかった。悦子の夫の篠原がその日年始に来たついでに倫を見舞った。

(女坂)

- 彼は月夜山の中腹で足を止めた。呼吸を整えないとそれ以上は走れなかった。彼は観念したような顔で、砂の上に腰をおろした。胸の鼓動がなかなかおさまらなかつた。

(火の島)

- あの雪の降っている夕方、殆ど一足一足立ちどようにしてやっと家まで帰りついた。内玄関の格子を開けて框に腰をおろすとぼうとして口もきけなかつた。

(女坂)

これらの例においては、自分のめざす動作や活動の実現をさまたげるのは、自分の何らかの内的な生理的な状態であるが、その内的なものとなっているものは、心理的なことがらや状態であるばあいもある。そして、その内的な心理的なことがらによって、その実現をさまたげられるものも、具体的な動作や活動のほか、生理的な活動や心理的な活動、言語活動や知覚活動、思考活動や認識活動、ものごとの理解やものごとに対する態度であったりする。

- 今度は陸路市川へ出て、市川から汽車に乗ったから、民子の近所を通ったのであれど、僕は極(きま)りが悪くてどうしても民子の家へ寄れなかつた。又僕に寄られたらば、民子が困るだろうとも思って、いくたび寄ろうと思ったけれど遂に寄らなかつた。

(野菊の墓)

- はじめは何の気もなく聞いておりましたが、そのうちに、だんだんその
笛の音に引きつけられて、しまいには、一歩も前へ進めなくなりました。
(赤い鳥)
- 思い余って途方に暮れてしまって言わずにいられなくなって出て来たよ
うなその声は極く小さかったけれども、実に恐ろしい力で岸本の耳の底に
徹(こた)えた。それを聞くと、岸本は悄(しお)れた姪(めい)の側にも
居られなかった。
(新生 上)
- 帰りは茅町(かやちょう)まで帰る富川と一緒に、富川に無理矢理
電車に乗せられてしまった。電車がうごき出すと、周吉は胸騒ぎがして、
目を開けていられなかった。冷々(ひえびえ)した風が襟元を吹いて行
く。周吉は厭な気持ちで何度となく襟元を詰めた。
(林芙美子)
- その晩は遅く寝た。過度の疲労に刺激されて、反って能(よ)く寝就か
れなかった。例の癖で、頭を枕につけると、またお志保のことを思出し
た。
(破戒)
- 眠らねばならないと思った。神津島以来の蓄積された疲労を、いく分
でも恢復(かいふく)させて置かないと今後の行動に関係すると思ったが、
疲労と興奮が刺激になって眠れなかった。彼は頭の中で火山の歴史の頁を
めくった。
(火の島)
- 「いやいや、ちがう。風の声だよ。」そういって、また、目をとじてしま
いました。けれども、子どものむく鳥は、どうにもねむられませんでした。
こっそりと、ほらの出口にしてみました。すると、それは、とうさ
ん鳥のいったとおりに、つめたい風が、黄いろいかれ葉をふいているので
した。
(浜田広介)

- 夜更けになっても、ゆき子は何時までも眠れなかった。糊（のり）臭いシーツに寝て、ごうごうと木枯しの音を聞いていると、富岡への思慕が火のように激しく燃えたって来る。（浮雲）
- 私はそれを妙貞さんにつげようと思っていたの。そしてそれを作文に書いたのだけれど、ふっときのうの順子さんのことを思いだして、あとが読めなくなったのよ。（壺井栄）
- 彼は是非とも名古屋の義雄兄に宛（あ）てた手紙を残して行くつもりで、幾度かあの宿屋の二階でそれを試みたか知れなかった。どうしても、その手紙は彼には書けなかった。彼はどういう言葉でもって自分の心を言いあらわして可（い）いかを知らなかった。（新生 上）
- 三日目に岸本は上海（しゃんはい）に着いた。船に乗ってから書こうと思った義雄兄への手紙は上海への航海中にも書けなかった（新生 上）
- 兄は出て行った。岸本は節子呼んで、兄の話と彼女に伝え、不安な彼女の心にくらかの安心を与えようとした。「でも、お前のことを頼むとは、いかに厚顔（あつかま）しくも言出せなかったどうしても俺には言出せなかった」と岸本は嘆息して言った。（新生 上）
- 洲羽は房野の質問にしばらくは答えられないでいた。所長に対する気兼ねもあるし、彼の火山調査官としての立場もあった。洲羽は所員たちの顔を見た。所員たちは洲羽に求めていた。言ってくれほんとうの気持をいっけてくれ、あなた以外に、火山のことをほんとうによく知っている人はいないのだ。所員の目はそう言っていた。（火の島）
- 「君、毎日、今まで何時間眠っている？」この犬飼の質問に、洪作はすぐには答えられなかった。何時間眠るか、自分の睡眠時間など算えてみたこ

とは一度もなかった。

(しろばんば)

- 哄笑(こうしょう)して花鳥は去って行ったが、白川は唾になったようにしばらくは口がきけなかった。自分ながら自分らしくない虚脱状態だった。
(女坂)
- 「かけ足で通っただけです。お父さんが、仏像のところへ、いついらっしやるかわからないから、それが気にかかって、ほかはゆっくり見ていられなかった……。」
(舞姫)
- 二人の少年が庭石の上に立っている。その一人が義雄兄の子供で、一人は繁だ。兄さんらしく撮れた泉太の姿をその弟の傍に見ることも出来る。義雄兄が居る。嫂はその家で生れた男の児を抱いている。岸本は兄夫婦の写真顔をすら平気で眺(なが)められなかった。
(新生 上)
- 「その帰りに公園で、『臉の母』を見たが、途中で俺あいやあになっちゃってね。見ていられなかったよ」「泣いたのか」
(野火)
- 頂上火口丘調査に加わったメンバーは五名だった。木庭は洲羽のそばを離れなかった。絶えず話しかけた。話していないと落ちつけないようだった。おどおどした態度だった。質問の内容は火山と地震に関することだけだった。火山学に熱心なのではなく、噴火の恐怖が、にわかになにに火山の知識をひろめようとしているように思われた。
(火の島)
- だから重太郎も、納得のゆかない気持ながらも、口をつぐんでいっさいの進行を見送ったのであったが、口を出し得ないことと、心の落ちつきとは別のことである。いや、口が出せないだけに気分のもやもやしたものは、いっそうこうじたのであった。この二つのはっきりした答えが出ぬ以上は、彼の心は何としても落ちつけそうになかった。
(点と線)

- 新免は危険地帯から遠のいて行く自分を見つめていたが、まだ助かった
という結論的なものは得ていなかった。ひどく気が立っているのに、外面的には落ちついたような顔をしている自分が、自分ながらおかしかった。助かった、助かったと、いくら口の中でいっても、助かったような気持にはなれなかった。新免春治は反応のない、虚(むな)しさで、救命道着の胸をたたきながら、ふと、夢を見ているのではないかと思った。(火の島)
- 知っている!知っているに違いないと思った。今までにも何度も、みゆきが自分の何もかもを見抜いているのではないかと思ったことはあったが、しかしその場合はいつも直ぐあとからそれを打ち消すことが出来た。しかしこんどはそうした気持になれなかった。自分という人間も、自分のやっていることも、何もかも舟木みゆきには見抜かれてしまっていると思
った。(黒い蝶)
- 電気蒲団で腰があたたまってきたと、ゆき子は、富岡の荒々しいあの時の力を微笑して思い出していた。何時(いつ)までも心の名残りになるような、あの時が、肉体の一点に強く残っているその事を考えると、富岡に
対して平静にはなれなかった。(浮雲)
- 三沢にどうだろうと云った自分の妹のお重は、まだ何処へ行くとも極(きま)らずに愚図々々している。そういう自分もお重と同じ事である。折角身の堅まった兄と嫂は折り合わずにいる。こんな事を対照して考えると、自分はどうしても快活になれなかった。(行人)
- 巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。強敵いよいよござんなれ、
と思った。そこで巳之助は、だまっていられなかった。村の人びとのあいだに、電燈反対の意見をまくしたてた。(新美南吉)

このような例には、「きいていられなかった・味わっていられなかった・気

分になれなかった・～する気になれなかった・心持ちになれなかった・考えて
いられなかった・耐えられなかった・じっとしていられなかった・望めなかつ
た・がまんしきれなくなった・辛抱し切れなくなった・待ち切れなくなった・
しまっておけなくなった・誘惑に勝てなかった・まじめになれなかった・抑え
切れなかった・考えていられなかった」などがある。

つぎのような例では、過去のことであってもいづらか具体的な時間とい
うよりもいづらか時間的な〈はば〉があるのかもしれない。

- ・ 僕はよく岸に立ってその景色を見渡して、家に帰ると、覚えているだけ
を出来るだけ美しく絵に描いて見ようと思いました。けれどもあの透きとお
るような海の藍色（あいいろ）と、白い帆前船などの水際（みずぎわ）近
くに塗ってある洋紅色（ようこうしよく）とは、僕の持っている絵具（え
のぐ）ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても
本当の景色で見るような色には描けませんでした。（赤い鳥）
- ・ 岩滑（やなべ）の学校はいなかの学校だから、なんといっても都会ふう
の少年はみんなの目をひくのである久助君も最初から、なんとなく太郎左
衛門に心をひかれたのだが、よい機会がないので近づけなかった。
（新美南吉）

②【知覚や認識の非実現】

しかし、つぎのような例になると、何らかの内的なことがらや内的な条件
によってべつの心理活動の実現がさまたげられるということではなく、ある対
象への認識や理解や判断、思考や心理や態度それ自体の非実現がのべられてい
る。

- ・ 房野八郎は一番最後に六号ゴムボートに乗った。たいへん大きな忘れ物

をしたような気がしたが、その忘れ物がなんであるか分からなかった。とにかく、たいへん大事な、どうしても忘れてはならないものを観測所のかへ置き忘れたのだが、それがなんであるか思い出せなかった。(火の島)

- しかし、眼は声の主を探しながら、私はそれが私の幻想であることを意識していた。その声は誰かたしかに、わたしの知っている人の声だと私は感じたが、その時誰であるかは思い出せなかった。(野火)
- そうして自分を村境までおぶって送ってくれた。自分も其の時悲しかったことと、お松が寂しい顔をうなだれて、泣き泣き自分を村境まで送ってきた事が忘れられなかった。(野菊の墓)
- 加野は、サイゴンなんか、どうでもよくなっていた。今夜の、星あかりに見たゆき子の、獣のような眼の光りが忘れられなかった。(浮雲)
- 汽車の窓硝子に顔をくっつけて、金魚のように口をぱくぱくさせていた、妻の顔が、初之輔には、忘れられなかった。そのくせ、初之輔には、久々な孤独を愉(たの)しむ、はずんだ思いもある。(めし)
- 海蔵さんは、人びとのためだということをいろいろ説(と)きましたが、どうしても利助さんには「のみこめ」ませんでした。しまいには利助さんは、もうこんな話はいやだというように、「おかか、めしのしたくしろよ、おれ腹がへっとるで」と、家の中へむかってどなりました。(新美南吉)
- 倫には行友の気持ちも須賀の気持ちも側でみていながら、一向のみこめなかった。(女坂)
- 「電気とやらいうもんが、こんどひけるだけな。そいでもう、ランプはい

らんようになるだけな」とこたえた。巳之助はよくのみこめなかった。電気のことなどまるで知らなかったからだ。(新美南吉)

- あれ程学問もあり、弁才もあり、何一つ備わらないところの無い好い人で、殊（こと）に宗教（おしえ）方の修行もしていながら、それでまだ迷いが出るというのは、君、どういう訳だろう。我輩は娘からあの住職のことを聞いた時、どうしてもそれが信じられなかった。いや、嘘（うそ）だとしか思われなかった。(破戒)

- 登山を好む島村は山を眺めながら歩くと放心状態となって、知らぬうちに足が早まる。いつでも忽（たちま）ち放心状態に入り易い彼にとっては、あの夕景色の鏡や朝雪の鏡が、人工のものとは信じられなかった。自然のものであった。そして遠い世界であった。(雪国)

- しかし、成吉思汗（ジンギスカン）は、やはり母ホエルンの幕舎にムンリクの姿を見出（みいだ）すことは不快であった。母は許せたが、ムンリクの方は許せなかった。(蒼き狼)

- 伝令を出してやった二人が二人とも帰って来ないことがひどく癪（しゃく）にさわった。安全地帯に逃げたい気持は分るが、職場を放棄したふたりは許せなかった。(火の島)

「読み取れなかった・見いだせなかった・読めなかった・悟れなかった・解せなかった・思いつけなかった・考え出せなかった・受け取れなかった・笑えなかった・なじめなかった・認められなかった・感じられなかった・見受けられなかった」などもこのような例である。

③【能力・特性の非存在】

否定形の過去の〈可能のかたち〉は、基本的には、過去における動作やできごとの〈非実現〉をあらわしていることになるのだが、それが過去ではあったとしても、具体的な時間のありか限定がされていないばあいには、人間のその実現の能力が欠けているという〈能力の存在の否定〉をあらわすことになる。過去における〈アクチュアルな非実現〉ではなく、ポテンシャルなこととしての〈不可能性〉である。

- 妹は、まだ字が書けなかった。(字のないはがき)
- その後、少佐は退役して、ある都会の会社につとめました。少佐は、たびたび張(ちょう)親子を思い出して、人びとにその話をしました。張親子へはなんべんも手紙を送りました。けれども、先方ではそれが読めなかったのか、一どもへんじをくれませんでした。(新美南吉)
- ブルテチュ・バガドルは人が集まりさえすれば、必ず自分の頭に詰込であるものを糸でも手繰(たぐ)り出すように引張り出す役割を忠実に勤めた。それで、彼の話のある部分は多勢の者にすっかり覚えられていたが、しかし、誰もブルテチュのようにうまくは話せなかったし、また彼のように際限もない程の長い話を頭にしまい込むことなど思いもよらなかった。(蒼き狼)
- 「じぶんのこと忘れて。久子だって人の前じゃろくに唱歌もうたえなかったじゃないか。それでもちゃんと、一人前になったもの。」(二十四の瞳)

「ひとりでは道が歩けなかった・糊が上手に使えなかった・一行も満足に読めなかった・そう早くは歩けませんでした・もうすっかり年をとってもう馬にも乗れなくなりました」なども、この例である。

④【場所やものの特性】

さらに、動作の主体が一般化されれば、人間の〈能力の欠如〉でもなく、ものや場所のもつ〈特性〉としてのべられることになるだろう。

- まだランプということばを知らなかったのである。店の人は、巳之助がゆびさした大きいつりランプをはずしてきたが、それは十五銭では買えなかった。 (新美南吉)
- 津田の部屋は診察室の真上にあった。家の構造から云うと、階子段を上ってすぐ取付（とりつき）が壁で、その右手が又四畳半の小さい部屋になっているので、この部屋の前を廊下伝いに通り越さなければ、津田の寐ている所へは出られなかった。 (明暗 下)
- 島は黒い絶壁をめぐらせていた。島の西側だけがゆるい傾斜地で、そこから断崖を縫うようにして登る道があった。その道を登って来る以外に観測所へは来られなかった。夜、歩ける道ではなかった。なして提電灯なしで登れるところでもなかった。 (火の島)

【おわりに】

奥田靖雄は、すでに『現実・可能・必然（上）』のなかで、「することができる」を述語にする可能表現の文を《可能表現の語彙・構文的な手つづき》とよびながら、くわしく体系的にとりあつかっている。この報告は、この奥田の論文に全面的にまなびながら、「行ける・走れる・食べられる」のような、動詞の〈可能のかたち〉を述語にする可能表現の文について記述したものである。奥田はこの〈可能形（可能のかたち）〉を述語にする可能表現の文を《可能表現の形態論的な手つづき》によるものとよんでいる。

また、奥田はこの論文のなかで、はなし手が現実とのかかわりのなかでつくりだしていく《文の対象的な内容としての出来事存在のし方 modus》を主観的なモダリティ・とよび、それにしたがった文の分類を「ものがたり文・まちのぞみ文・さそいかけ文・たずねる文」のような通達的なタイプとしている。そのうえで、「現実表現の文・可能表現の文・必然表現の文」を《ものがたり文》のわくのなかにおさめながら、いずれも、現実の世界の出来事をはなし手が確認することによって、文の対象的な内容としての出来事が存在しているとのべている。そして、その現実の世界の出来事存在のし方をはなし手がどのように確認し、とらえているかを《客観的なモダリティ・》とよび、これらの3つの文のタイプを分析している。この報告も、この奥田の分類にしたがいながら、動詞変化の総合的なかたちである〈可能形（可能のかたち）〉を述語にする可能表現の文について記述してきた。いくらかでも奥田のこの論文の内容をうけとめることができたとおもっている。

これまで「〈みえる・きこえる〉を述語にする文」「自発表現の文」「可能表現の文」と、つづけて報告してきたのだが、いずれも、はなし手が現実の世界のできごとをどのようにとらえて表現しているかということからこの種の文を検討している。すなわち、《ものがたり文》のわくのなかでの、この種の文の述語の文法的なかたちのなかにこめられている、はなし手の〈確認のし方〉や〈判断のあり方〉とはどういうものであるかということである。まだ、用例にもとづいて具体的に記述している段階であり、文のタイプとしての体系的な整理について、もうしばらく研究をつづける必要がある。